

内垣外遺跡発掘調査報告

— 多気郡多気町相鹿瀬所在 —

1997. 3

三重県埋蔵文化財センター

序

町域の大半が櫛田川右岸に広がる多気町の中で、相鹿瀬地区は女鬼トンネルを越えて南側の宮川左岸に位置します。この地には奈良時代の逢鹿瀬廃寺が所在し、歴史のある地域であることが知られていました。

しかし、一方で、地域の発展を望む人々にとって道路の整備は緊要な課題で、特に宮川沿いに大台町新田の国道42号線とつながる県道相鹿瀬大台線は重要な交通路であり、その改良は地域住民にとって待ち望まれた事業のひとつであったと言えます。ところが、この事業の計画地内には埋蔵文化財が所在し、その保護と道路改良事業の実施との整合を図るためやむを得ず事前に発掘調査を実施し、その内容や実態について記録による保存に留めることとなりました。

今回報告させていただきます「内垣外遺跡」もこのような埋蔵文化財のひとつで、大台町柳原にある森ノ上遺跡と共に平成8年度に県道相鹿瀬大台線の改良事業に伴って実施したものであります。今年度の道路事業に伴う発掘調査は各所で重要な発見が続出し、内垣外遺跡の調査に着手できたのは12月になってからでした。その調査も寒風の中、地元の皆様のご助力と担当職員の努力により、ようやく3月になって現地調査の終了を迎えることができました。この成果が地域の歴史の解明にとって一助となればと念じております。

文末となりましたが、調査の実施に当たりご協力賜りました三重県土木部道路建設課、同松阪土木事務所、多気町教育委員会、管内文化財調査員各位並びに地元各位に感謝申し上げます。刊行のご挨拶とさせていただきます。

三重県埋蔵文化財センター

所長 奥村敏夫

本文目次

I. 前言	1
II. 位置と歴史的環境	2
III. 遺構	9
IV. 遺物	15
V. 結語	17

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡地形図／字切り図	3
第3図 調査区位置図	4
第4・5図 調査区遺構平面図／上層土層断面図	5～6
第6・7・8図 A地区東部・西部・B地区下層石器分布図／下層土層断面図	7～8
第9図 SK11実測図	10
第10図 SB36・SB40・SB41実測図	11
第11図 SB37・SB38・SB39実測図	12
第12図 SE14・SE19実測図	13
第13図 SE20・SE32実測図	14
第14図 出土遺物実測図(1)	20
第15図 出土遺物実測図(2)	21
第16図 出土遺物実測図(3)	22
第17図 中世墓出土銭貨(4)	23
第18図 中世墓出土銭貨(5)	24

表目次

第1表 出土遺物観察表	25～26
第2表 出土銭貨一覧表	26

図版目次

図版1 調査区遠景(西から)／調査前風景(西から)／調査区全景(東から)	27
図版2 A地区東部下層調査区全景(西から)／A地区西部下層調査区全景(西から)	28
B地区下層調査区(東から)／SB36(北から)	28
B地区掘立柱建物群(東から)／SD10・SD17(北から)	28
図版3 SK26(北から)／SK11(西から)／SX5(西から)	29
SK42(北から)／SE20(東から)／SE32(北から)	29
図版4 B地区下層調査風景(東から) B地区下層石器出土状況(南から)	30
B地区下層サンプル土採取地点土層(南から) B地区下層礫群出土状況(南から)	30
図版5 出土遺物(1)	31
図版6 出土遺物(2)	32
図版7 出土遺物(3)	33
図版8 出土遺物(4)	34

I. 前 言

(1) 調査の契機

一般県道相鹿瀬大台線は、多気郡多気町相鹿瀬から宮川沿いに大台町を通り、国道42号線に至る地域の幹線道路である。大部分は道幅が狭く、車の対向に難渋し、通行緩和と地域の振興のためにも、従来からよりスムーズな交通路の整備が必要とされていた。県土木部の事業計画の回答により、平成4年度に事業地内の分布調査を行ったところ、中世の遺物の散布が認められ、平成7年度の試掘調査では、室町時代の土師器の皿・鍋と共に土坑・柱穴などの遺構が確認された。この遺跡の取り扱いについては、その保護に努めるべく関係機関で協議を重ねたが、現状保存は困難と判断し、やむなく発掘調査を実施して記録保存することとなった。

なお、当遺跡の名称については、現地調査の段階では「宇治垣内遺跡」と呼んでいたが、のちに正式な小字の表記は内垣外であることが判明したため、以後、「内垣外遺跡」として報告したい。

(2) 調査の方法と経過

本遺跡の調査は、中近世の遺構・遺物が中心である上層の調査と、石器の出土が見られた下層の調査に大きく分けられる。また、東西に細長い調査区のうち、便宜上、東3分の1にあたる部分をA地区、一段低い残りの部分をB地区として呼称した。

① 調査の方法

調査は、遺構面に影響のない範囲で重機による表土の除去を行った。

小地区の設定は、上層の調査では、4m×4mを基準とし、北から南へアルファベットを、東から西へは数字の番号を与え、地区名は北東隅の杭を基準とした。下層については、調査対象範囲について上層のD6の杭を基準に、2m×2mの小グリッドを設定し、北東隅の杭を基準に遺物を取り上げた。

② 調査日誌 (抄)

11月26日 表土除去。(以後、ダンプ進入路に湧水があるなどして、A地区だけで一週間かかる。) いきなり調査区を南北に横断して溝が現れ、土師器の皿・鍋が出土。

12月3日 遺構検出開始。東西に細長い調査区の北部分は、黄褐色土、南部分は黒ボクが検出面となる。

12月6日 調査区東端部の4ヶ所で、銭・刀子が出土。墓にしては、どの土坑も浅く、小さ過ぎる気がして判断つかず。

12月9日 B地区の表土除去開始。またもすぐに溝が現れ、瓦・陶器片が大量に出土。

12月12日 黒ボクや風倒木、木の根などで遺構の見極めが難しい状況が続いたが、今日初めて掘立柱建物を1棟確認。その建物の横の土坑を掘削中、急に埋土が落ち込んで穴が開き、井戸と判明。瓦の出土が多い。

12月16日 ピットがたくさん見つかるが、掘立柱建物としてはなかなかまとまらない。

12月24日 朝、ものすごい霜柱。その除去とその後ぬかるみで作業がはかどらない。翌日検出を行う部分については、作業終了後ブルーシートをかけておくことにする。

12月25日 A地区の遺構写真撮影。

1月14日 A地区の実測。

1月16日 調査区ほぼ中央の北壁沿いのピットからフレイク出土、前日に続き、これで2個めなので近くの遺構のないところに1m×1m程のテストピットを4ヶ所設定し掘削、あわせて4個のフレイクが出土。

1月17日 テストピットから数個のフレイクと砂岩質のこぶし大の石出土。A地区の実測終了。

1月23日 SK26掘削完了。整理箱7箱分の土師器鍋出土。

1月30日 B地区の実測。

2月4日 スカイマスターによる全景写真撮影。

2月5日 本日より、下層の調査に入る。2m×2mのテストピットを10ヶ所設定。

2月10日 テストピットの掘削の結果、調査区の北半分にはフレイクが多いことが判明。出土の多い部分を拡張して掘り下げる。

2月14日 1日で100個近いフレイク出土。

2月20日 調査区中央の北壁沿いで砂岩質の礫群
出土。炭化物も少々混じる。

2月24日 下層写真撮影。

3月3日 上層の4基の井戸の断ち割り。SE20か
らは底を抜いて井戸枠にした木桶出土。

SE32からは、「蕪民将来子徒也」と墨
書された呪符木簡と息抜き竹筒出土。

3月4日 井戸の実測。

3月5日 現地を松阪土木事務所へ引き渡す。

Ⅱ. 位置と歴史的環境

(1) 位置

内垣外遺跡(1)は、三重県多気郡多気町相鹿瀬字内垣外に所在する。現在の行政区画では多気町の南端にあたり、南は度会郡度会町・大宮町、東は同郡玉城町、西は多気郡大台町と近接している。地形的には、紀伊山地に源をもつ河川である宮川の中流域左岸に位置する。宮川はこの辺りでは、相鹿瀬の西の浅間山、東の国東山から派生する丘陵を挟るよう大きく蛇行して流れ、兩岸に発達した河岸段丘を形成している。内垣外遺跡は、その段丘中位面に立地し、標高は約47mである。遺跡の北側は、浅間山からのびる丘陵が迫っている。

(2) 歴史的環境

① 旧石器時代

宮川は、上流の山系は硬い砂岩と頁岩、チャートからなっており、それらは石器の石材として古くから流域で利用されてきた。ナイフ形石器や細石器などが数多く出土した東海地方屈指の旧石器時代の遺跡である大台町栃原の出張遺跡(2)は、当遺跡の上流約3kmにある。更に上流に溯ると、同じく大台町新田の中野遺跡、栃原の黒ヶ谷(中新田)遺跡、神瀬の往来道下遺跡、佐原の向林遺跡でナイフ型石器が出土している。内垣外遺跡より下流では、度会町下久具の山崎遺跡、玉城町岩出の角垣内遺跡でナイフ



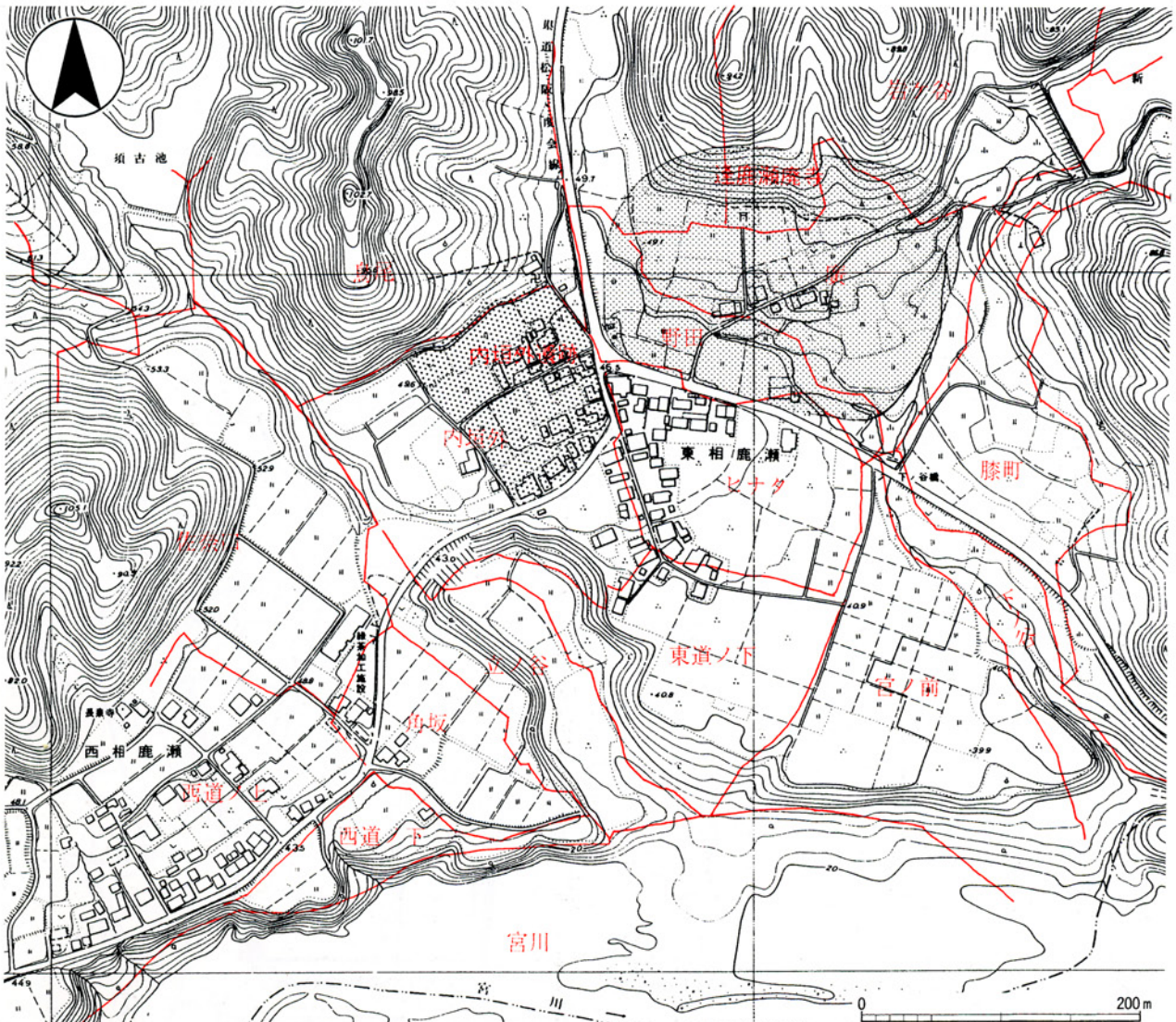
第1図 遺跡位置図 (1:25,000) [国土地理院 国東山 1:25,000]

形石器が見つかっており、当遺跡のすぐ南の日向遺跡(3)でも同様の石器の出土が確認されている。

② 縄文時代

草創期の遺跡としては、多気町四正田の高皿遺跡^③、相可の牟山遺跡で木葉形尖頭器・神子柴型石斧・円形の搔器などが出土している。早期としては、同じく牟山遺跡で大川式・神宮寺式の押型文土器が出ており、当町東池上の坂倉遺跡では多くの炉跡とともに有舌尖頭器や大鼻式・大川式土器が見つまっている。早期の煙道付き炉穴と竪穴住居が検出された遺跡としては、松阪市射和町の鴻ノ木遺跡も挙げられる^④。続く前期は、遺跡の数は少なくなるが、宮川流域では、北白川下層Ⅱ式の土器や石鏃が多数出土している度会町下久具万野遺跡がよく知られている。中期になると遺跡数が増加するが、当町では田

中のナゴサ遺跡など中期後半の遺跡が多い。後期も遺跡数は多く、当町では、平成6年・8年に発掘調査を行った相可の新徳寺遺跡で北白川上層式Ⅰ期の土器や石鏃が出土し、同じく森荘川浦遺跡では、一乗寺K式～宮滝式の土器や数多くの石鏃が出ている。宮川流域では、度会町森添遺跡の元住吉Ⅱ式等の土器、伊勢市の佐八藤波遺跡でも石鏃や石鏃が多く出土している。中でも森荘川浦遺跡・森添遺跡などは、この時期、拠点集落として朱を使用するなど、当時としては先進的な文化を発展させていた。晩期には遺跡数は減るが、前述の森添遺跡・佐八藤波遺跡は晩期まで継続する。後期・晩期になると石器の石材は、在地のチャートよりサヌカイトの利用が多くなるようである。



第2図 遺跡地形図および遺跡周辺字切り図 (1:5,000)

※字界線は明治18年頃のものであり、現行と異なる部分もある。

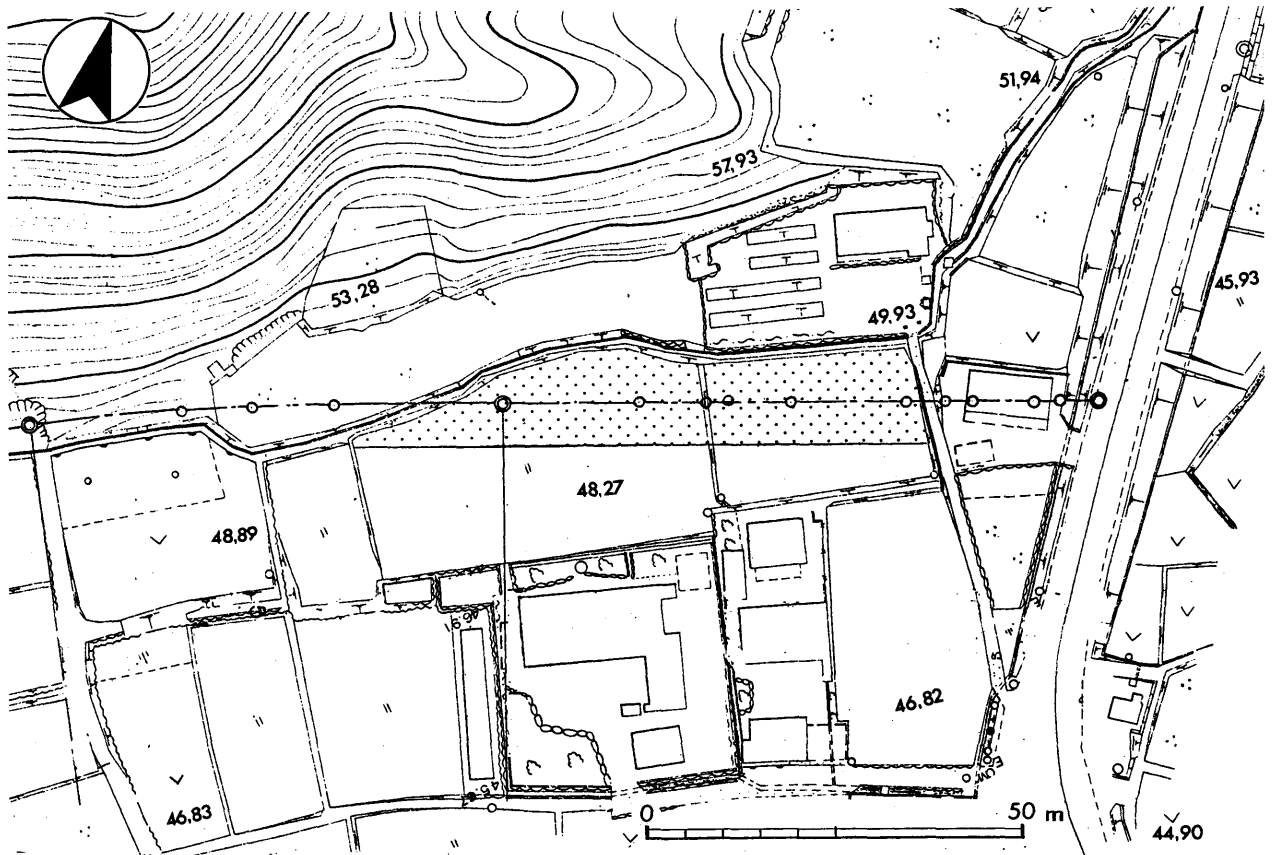
③ 弥生時代・古墳時代

近畿から中伊勢地方伊勢湾岸にいち早く達した弥生文化は、前期の段階で既に大台町の宮川中流域まで及ぶ。中期には、上流域の宮川村まで上り、米作りの進展に伴って後期には、玉城町以東の下流域に集中して分布する。しかし、この時期、流域には県内の他の地域に比べ拠点のといえる集落は知られていない。多気町内でも宮川の北方を流れる櫛田川流域では、当町と境を接する松阪市中万の鐘突遺跡で前期の円形竪穴住居が、同じく当町牧の花ノ木遺跡で中期の竪穴住居・方形周溝墓が検出されており、後期の土器も相可の相可高校グラウンド一帯で出土を見ている。古墳時代も弥生時代同様に大規模な集落跡は見つかっておらず、中期になって本町土羽茶屋で権現山1号墳・2号墳という2つの方墳が確認される。この権現山古墳は、多気・明和・玉城町の三町域に広がる玉城丘陵の南西隅に位置するが、この丘陵には約400基の古墳が分布しており、南伊勢地方では最大の古墳群密集地である。その多くは後期の群集墳であるが、中でも、およそ100期の古墳があったとされる当町河田の河田古墳群はよく知ら

れている。⁷⁾

④ 奈良・平安時代

奈良時代については、当遺跡と東接する逢鹿瀬廢寺(4)について触れておきたい。逢鹿瀬廢寺は、伊勢神宮の神宮寺として天平神護2年(766)に『続日本紀』に、また神護景雲元年(767)『太神宮雜事記』⁸⁾に記述が見られる。従来、この二つの資料の解釈の仕方により、建立年代、位置、太神宮寺としての時期などに諸説が出されてきた。『太神宮雜事記』によると神護景雲元年(767)には太神宮寺になっており、宝龜6年(775)年、二所大神宮の朝夕の御膳料である鮎をとる神民を逢鹿瀬寺の僧が陵轢し、御贄を穢すという事件を機に、翌年太神宮寺としての資格は失われたとされる。寺域は、相鹿瀬字廣を中心に東西150m・南北150mと推定される。現況は、水田・畑地となっており、伽藍配置は不明である。今回の内垣外遺跡の調査でも、逢鹿瀬廢寺のものと思われる単弁重弁八葉蓮華文軒丸瓦などの出土を見た。これらの瓦は、逢鹿瀬廢寺の東南1.5kmにある西谷遺跡(柄ヶ池瓦窯)で焼かれたものとされている。

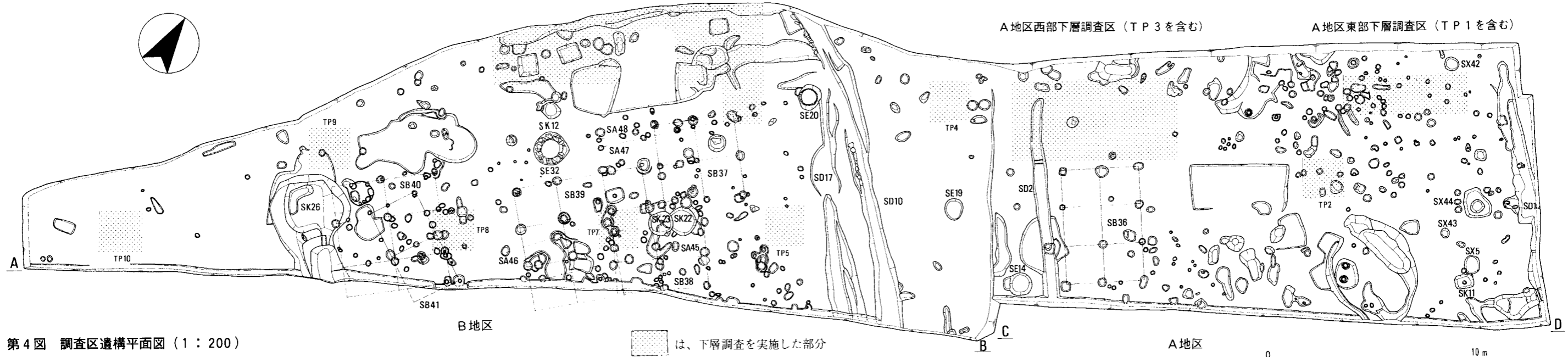


第3図 調査区位置図 (1:1,000)

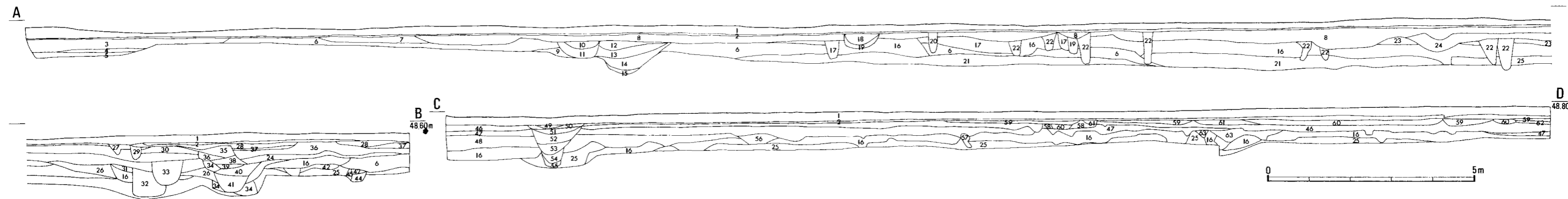
B地区下層調査区 (TP6を含む)

A地区西部下層調査区 (TP3を含む)

A地区東部下層調査区 (TP1を含む)

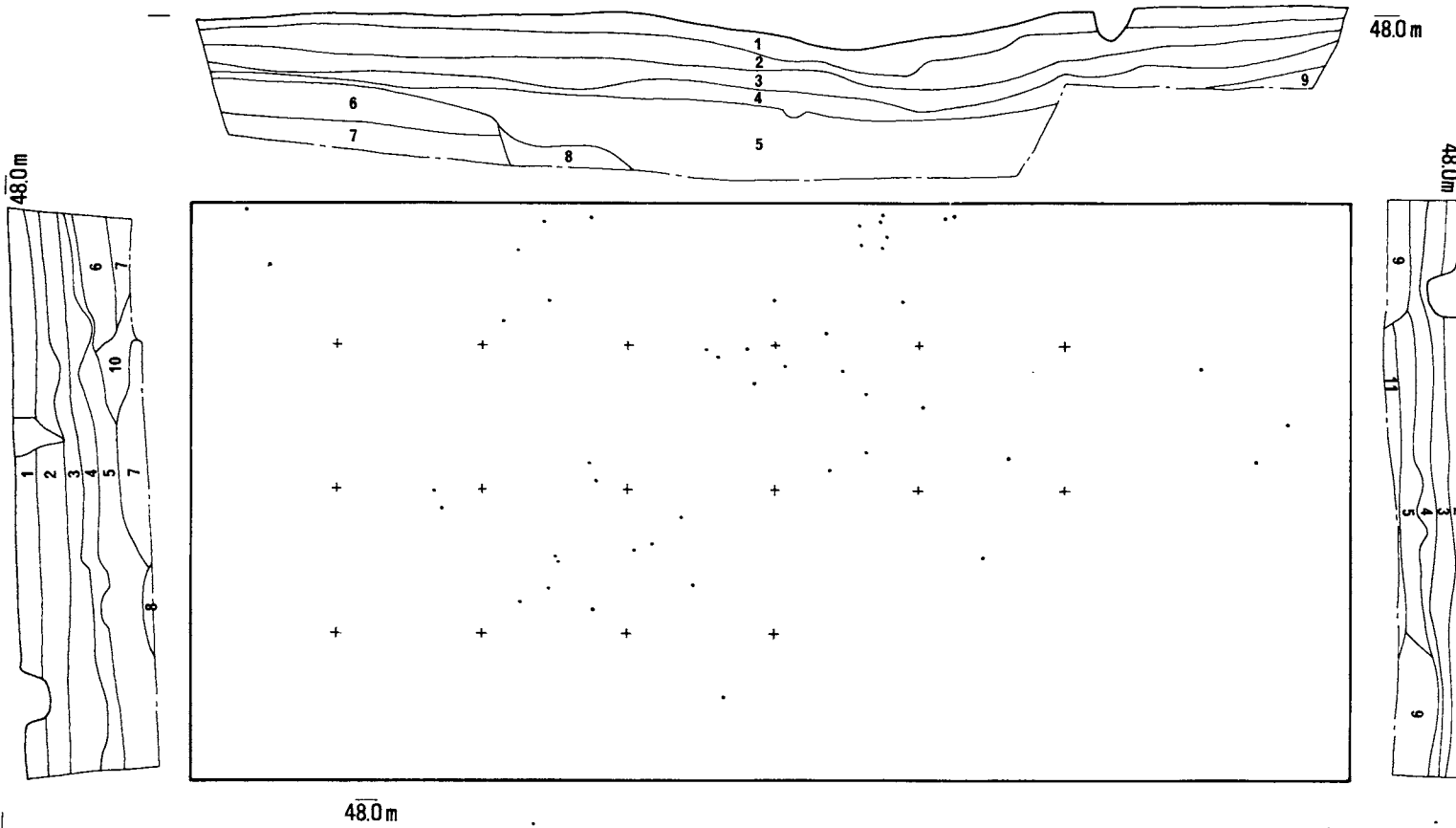


第4図 調査区遺構平面図 (1:200)

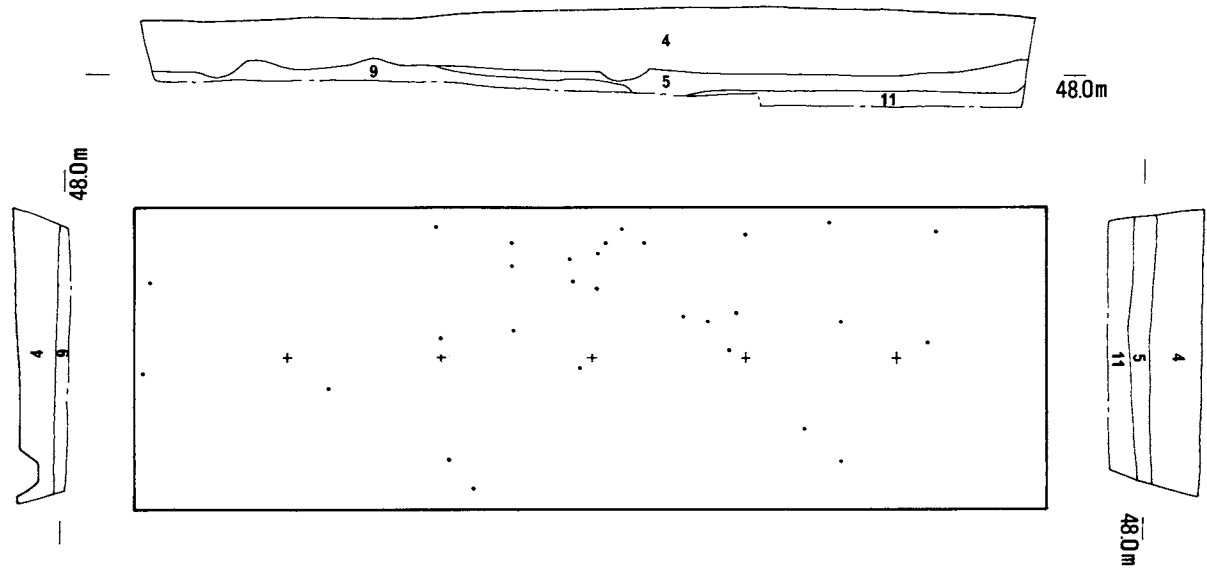


第5図 調査区上層土層断面図 (1:100)

- | | | | |
|---|---|---|--|
| <p>1. 耕作土</p> <p>2. 床土</p> <p>3. にぶい黄橙色土 (黄褐色土ブロックと多くの礫を含む)</p> <p>4. やや赤みがかった明黄褐色粘質土</p> <p>5. 灰白粘土</p> <p>6. やや赤みがかった暗褐灰色土 (礫を含む)</p> <p>7. にぶい黄橙色土 (礫を多く含む)</p> <p>8. 暗褐灰色土 (礫を含む) [包含層]</p> <p>9. 明黄褐色粘質土 (礫を含む)</p> <p>10. 黒褐色土 (こぶし大の礫を含む)</p> <p>11. 明黄褐色粘質土 (黄褐色土粒を多く含む)</p> <p>12. 黒褐色土 (少し礫を含む)</p> <p>13. 黒褐色土 (礫・黄褐色粘質土を含む)</p> <p>14. 黒色粘質土 (礫を含む)</p> <p>15. やや灰色がかった黒色土 (礫を含む)</p> <p>16. 黒色土 (礫を含む) [黒ボク]</p> | <p>17. 暗褐色土 (礫を含む)</p> <p>18. 黄橙色粘質土</p> <p>19. 灰黄褐色土 (礫を含む)</p> <p>20. 灰色の強い灰黄褐色土</p> <p>21. 黒褐色粘質土 (黄褐色土ブロックを含む)</p> <p>22. にぶい黄褐色土 (礫・黄褐色土ブロック含む)</p> <p>23. 黒褐色土 (礫を含む)</p> <p>24. 灰色の強い黒褐色土 (礫を含む) [包含層]</p> <p>25. 黄褐色土 (礫を含む)</p> <p>26. やや暗い褐灰色土 (少し礫を含む)</p> <p>27. 灰色の強い褐灰色土</p> <p>28. やや暗い褐灰色土 (礫を含む)</p> <p>29. 灰色の強い褐灰色土</p> <p>30. 灰色がかった暗褐灰色土</p> <p>31. 黒の強い暗褐灰色土 (少し礫を含む)</p> <p>32. 暗褐灰色土に黄褐色土粒が混じる (少し礫を含む)</p> | <p>33. 暗褐灰色土 (少し礫を含む)</p> <p>34. 褐灰色土に黄褐色土粒が混じる (少し礫を含む)</p> <p>35. 黒色土にやや暗い褐灰色土が混じる (礫を含む)</p> <p>36. 褐灰色土に黒色土が混じる (礫を含む)</p> <p>37. やや暗い褐灰色土に黒色土が混じる</p> <p>38. 褐灰色土</p> <p>39. 褐灰色土 (5cm大の礫が混じる)</p> <p>40. 褐灰色土 (5cm~10cm大の礫・遺物が混じる)</p> <p>41. 褐褐色土 (こぶし大の礫・遺物が混じる)</p> <p>42. 灰色の強い褐灰色土 (礫を含む)</p> <p>43. やや灰色がかった黒褐色土に黄褐色土が混じる</p> <p>44. 42より灰色の強い褐灰色土 (礫を含む)</p> <p>45. 灰色がかった褐灰色土で黄褐色土粒が混じる (礫を含む)</p> <p>46. やや白っぽい褐灰色土 (礫を含む) [包含層]</p> <p>47. やや赤みがかった褐灰色土 (礫を含む) [包含層]</p> <p>48. 赤みがかった暗褐灰色土 [包含層]</p> | <p>49. 明灰黄褐色土 (床土を含む)</p> <p>50. やや明るい灰黄褐色土 (床土を含む)</p> <p>51. やや明るい褐灰色土 (多くの礫を含む)</p> <p>52. やや白っぽい褐灰色土 (礫・多くの遺物を含む)</p> <p>53. 明褐灰色土 (礫を含む)</p> <p>54. やや明るい褐灰色土 (礫を含む)</p> <p>55. 54よりやや暗い褐灰色土 (少し礫を含む)</p> <p>56. 暗褐灰色土</p> <p>57. 黒色土に黄褐色土が混じる</p> <p>58. やや暗い褐灰色土</p> <p>59. 褐灰色土 (礫を含む)</p> <p>60. 褐灰色土に黒褐色土が混じる</p> <p>61. 暗褐灰色土 (黄褐色土・礫を多く含む)</p> <p>62. 明黄褐色土 (礫を含む)</p> <p>63. 赤みが強い褐灰色土 (焼土が混じる)</p> |
|---|---|---|--|

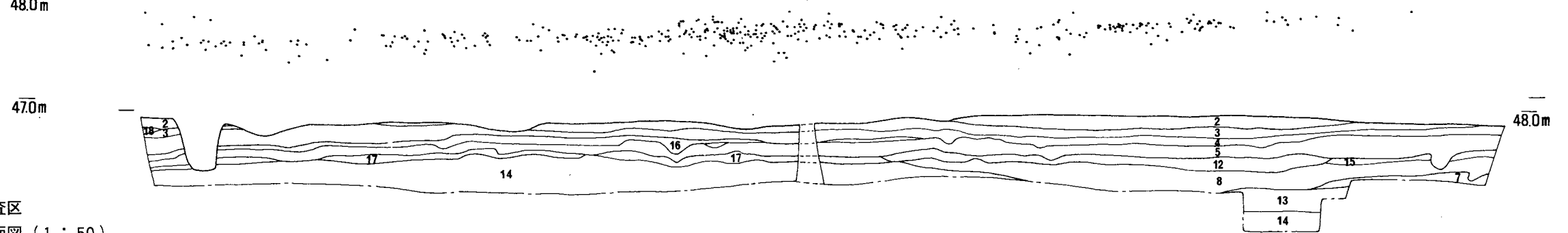
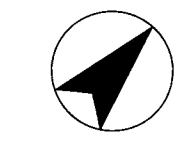


第6図 A地区東部下層調査区遺物分布および土層断面図(1:50)



第7図 A地区西部下層調査区遺物分布および土層断面図(1:50)

※+のない部分は、60cm程しか掘り下げていない



第8図 B地区下層調査区遺物分布および土層断面図(1:50)

- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 黒色土 (礫を含む) 2. 黄褐色土 (少し礫を含む) 3. 黄褐色粘質土 (少し礫を含む) 4. やや明るい黄褐色粘質土 (少し礫を含む、遺物、テフラと思われるブロックを含む) 5. 明黄褐色粘質土 (多くの礫・遺物を含む) 6. 暗褐色礫 7. 褐色粘質土 (非常に多くの砂・礫を含む) 8. 白の強い明黄褐色粘土 (酸化した鋳物らしき褐色の粒、小礫を少し含む) 9. 明黄褐色礫 10. にぶい黄橙色砂質土 (多くの礫を含む) | <ol style="list-style-type: none"> 11. 赤褐色粘土 (多くの礫を含む) 12. 5より粘性の弱い明黄褐色粘質土 (礫はあまり含まず、遺物含む) 13. 白の強い明黄褐色粘土 (褐色の粒、礫を多く含む) 14. 白の強い明黄褐色粘土 (褐色の粒を少し含む、礫はほとんど含まず) 15. 黄褐色粘土 (非常に多くの礫を含む) 16. 黄褐色粘質土 (礫はほとんど含まず) 4と同じ層か。 17. 白の強い明黄褐色粘土 (褐色の粒を多く含む) 6と同じ層か。 18. 淡灰白色粘質土 (少し礫を含む) 19. 灰白色粘土 (礫はほとんど含まず) 20. やや明るい黄褐色粘質土 (粘性強く、多くの礫を含む) |
|--|---|



平安時代～鎌倉時代にかけて特記しておくべきものとしては、本町河田の東裏遺跡、同じくカウジデン遺跡で掘立柱建物の遺構とともに墨書の杯が出土しており、東寺領の荘園、大国庄との関連が指摘されている。

⑤ 中世以降

古代、多気郡は、度会郡、飯野郡とともに神三郡と呼ばれ、伊勢神宮の神領となっていた。しかし、南北朝の動乱以後、南伊勢は一志郡美杉村に本拠を置く伊勢国司北畠氏が支配する所となる。この頃の北畠氏に関連する城砦として、外宮の神官度会家行

が城主であったと言われる多気町長谷の近長谷城、同町笠木の笠木氏館址などが挙げられる。また、この時代の集落跡として、大台町柳原にある森ノ上遺跡⁹⁴、(5)、度会町長原の野田・研山遺跡⁹⁵で掘立柱建物・土坑が見つかっている。北畠氏は、天正4年(1576)織田氏に滅ぼされ、これがこの地域の近世への大きな転換点となる。その後、慶長5年(1600)の関ヶ原の合戦以後の江戸時代は、多気郡の大部分は紀州徳川家の田丸領となる。玉城町田丸を起点とする熊野街道は本遺跡の横を通過しており、当時の相鹿瀬は多くの旅人で賑わったと思われる。

Ⅲ. 遺 構

(1) 地形と基本的層序

調査前は水田として利用されていた今回の調査地は、北側の丘陵裾に沿って東西に細長い。そのため元々は、北から南に向かって緩やかに傾斜する地形であったと思われる。また、東のA地区は、西のB地区より0.4 m程高いが、これはA地区が尾根部分に当たる地形だったためと考えられる。

基本的な層序は、上層においては上から耕作土、床土、遺物包含層である褐灰色土、黒色土(黒ボク)、黄褐色土の順となる。黒ボクの上の遺物包含層は、場所によっては3層になる。遺構の検出は、東西に細長い調査区の南半部分では黒ボクの上面で、黒ボクが消失している北半部分では黄褐色土上面で行った。黒ボクの消失は水田化の際に北半部分上面を削平したためと思われる。

下層においては、上述の黄褐色土以下、順に黄褐色粘質土、テフラと思われるブロックを含むやや明るい黄褐色粘質土、明黄褐色粘質土、粘性の弱い明黄褐色粘質土となり、それ以下は黄褐色系の粘土で、所々で礫層が入り込んで互層となっている。明確な遺構は確認できなかったが、遺物出土の中心は、明黄褐色粘質土で、その上下の層でも若干の遺物出土が見られた。

各層いずれも多かれ少なかれ礫が混じること、調査区の西へ行くほど土色が白っぽくなり、粘性が強くなるということが、共通の傾向として見られる。

(2) 検出した遺構

今回の調査において検出したのは、縄文時代の陥穴状の土坑1基と室町時代・江戸時代末期と思われる掘立柱建物6棟、溝4条、井戸4基、墓4基、土坑など中近世の集落遺構である。以下に時代順に述べていく。なお、下層については別の機会に詳細を述べることとし、ここでは出土位置等の概略だけを記述しておく。

① 下層について

上層の調査終了後、調査区内に2 m×2 mのテストピットを10ヶ所設定し、遺物の広がり調べた。その結果、A・B両地区合わせて約150㎡を調査対象範囲とした。調査の結果、遺物出土の中心となったのは、B地区中央北壁沿い、次いでA地区のやはり北壁に近い部分で集中して遺物が出土した。他の部分では、すぐに礫層があらわれるなど層が安定していなかった。出土層については、上層の遺構検出面から3層下の明黄褐色粘質土を中心に、その上下の層から大半の遺物が出土したが、さらに下の明黄白色系の粘土からの出土も若干見られた。出土した遺物の中で、目を引くのはB地区下層調査区で検出した30個ほどのこぶし大の砂岩礫である。これらの礫は、遺物包含層である明黄褐色粘質土から出土しているが、幅1.5m程の範囲に集中している。中には火を受けたと思われるものもあり、周囲の土にも少量の炭化物が見受けられた。遺構であった可能性も考えられる。

②縄文時代の遺構

A 土坑

SK11 A地区上層の南西部に位置する東西0.9m×南北0.65m、深さ0.8mの楕円形の土坑である。土坑壁は、ほぼ垂直で、底部中央に直径0.2m×0.2m、深さ0.1mの小穴が見られる。埋土より縄文土器片が出土していることから陥穴と考えられるが、断定はできない。なお、B地区中央にも同様の形状・規模の土坑があるが、埋土から江戸時代の瓦が出土しており、陥穴とは確定できない。

③室町時代から江戸時代の遺構

A 掘立柱建物

調査区南半部分を中心に多くの柱穴を検出し、6棟の掘立柱建物を確認した。出土遺物からいずれも室町時代の建物と考えられる。以下に東に位置するものから順に概要を記す。

SB36 A地区東部にある桁行3間(5.6m)×梁行2間(3.7m)の南北棟の総柱建物であったと考えられる。南面については伸びる可能性もある。柱間は、約1.8mの等間で、柱穴は直径0.4~0.6m、深さは0.1~0.3mを測る。棟方向はN23°Wである。柱穴より土師器の皿・鍋が出土した。

SB37 調査区のほぼ中央にある2間(4.0m)×2間(4.0m)の総柱建物である。柱間は約2.0mの等間で、柱穴は直径0.2m~0.5m、深さは0.2m~0.5mである。棟方向は、N29°W。柱穴より土師器の皿・鍋が出土した。

SB38 現況では調査区中央の南側にある、桁行2間(4.5m)×梁行2間(3.2m)と考えられる総柱建物である。但し、調査区外の南へ伸びる南北棟

の可能性が高い。桁行は、約2.2m、梁行が1.6m。柱穴は直径0.4m~0.5m、深さは0.2m~0.5mである。棟方向はN76°E。柱穴より土師器の鍋が出土した。

SB39 SB38より少し西に重複して位置し、調査区外の南へ伸びると考えられる桁行3間(6.2m)×梁行3間(6.2m)の総柱建物である。柱間は約2.0mの等間で、柱穴は直径0.4m~0.6m、深さは0.2m~0.6mである。柱穴に柱の基礎となる根石が置かれているものもあった。棟方向はN31°W。柱穴より土師器の皿・鍋が出土した。

SB40 調査区西部の南端にあり、調査区外の南に廂を持つと考えられる建物である。身舎の桁行2間(4.0m)×梁行2間(5.0m)で西に伸びる可能性もある。柱間は桁行1.8m、梁行2.7mである。廂は柱間1.5mである。柱穴は直径0.3m~0.4m、深さは0.2~0.7mで根石が置かれているものもあった。棟方向は、N29°Wである。柱穴より土師器の皿・鍋が出土した。

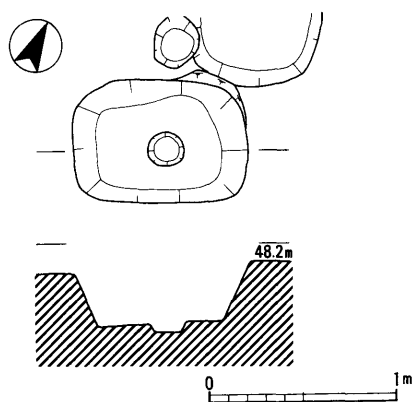
SB41 調査区西部の南端にあり、SB40と重なっている。調査区外南に伸びるため全体の規模はよくわからないが、身舎1間×1間で西と南に伸びる可能性がある。柱穴の大きさの違いから北1間分は、廂と考えられる。身舎・廂ともに柱間は、2.4mの等間である。柱穴の直径は、0.2m~0.5m、深さは0.2m~0.3m。棟方向は、N45°W。柱穴より土師器の鍋が出土した。切り合い関係からSB40より古い時期の建物である。

B 柱列

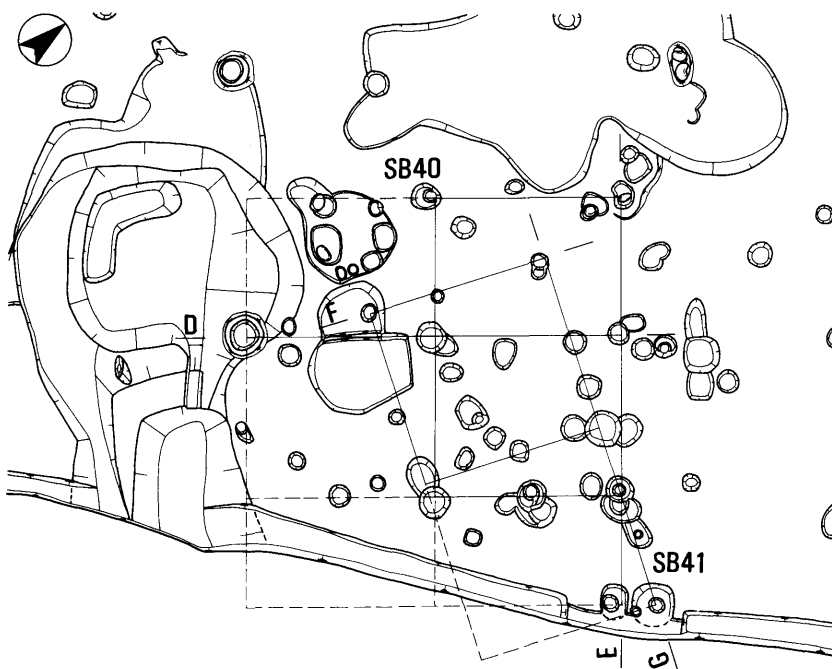
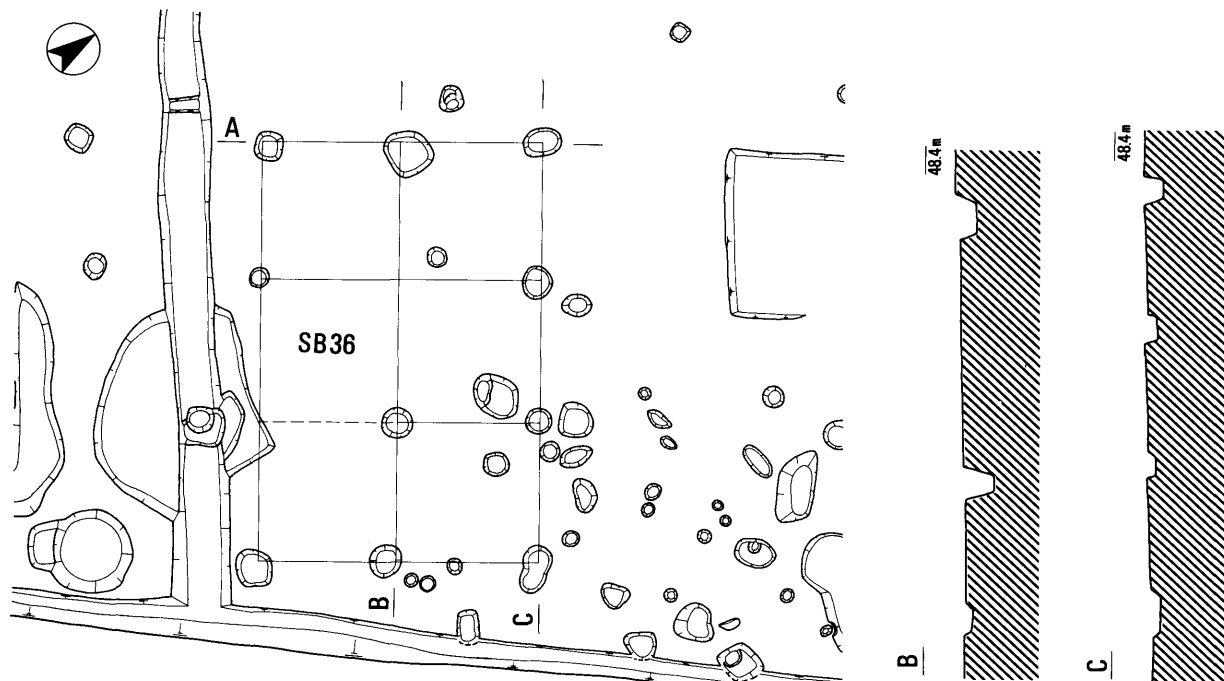
掘立柱建物としてはまとまらなかったが、多数の柱穴が見られ、中には位置・方向から柵もしくは、建物の一部と考えられる柱列が4ヶ所見られる。時期は、いずれも上記の建物群と同時期と考えられる。

SA45 一部他の遺構に切られているもののN57°Eの方向に3間(6.5m)分確認した。柱間は、2.2m程となる。柱穴の直径は、約0.45m。深さは、0.2~0.3m。

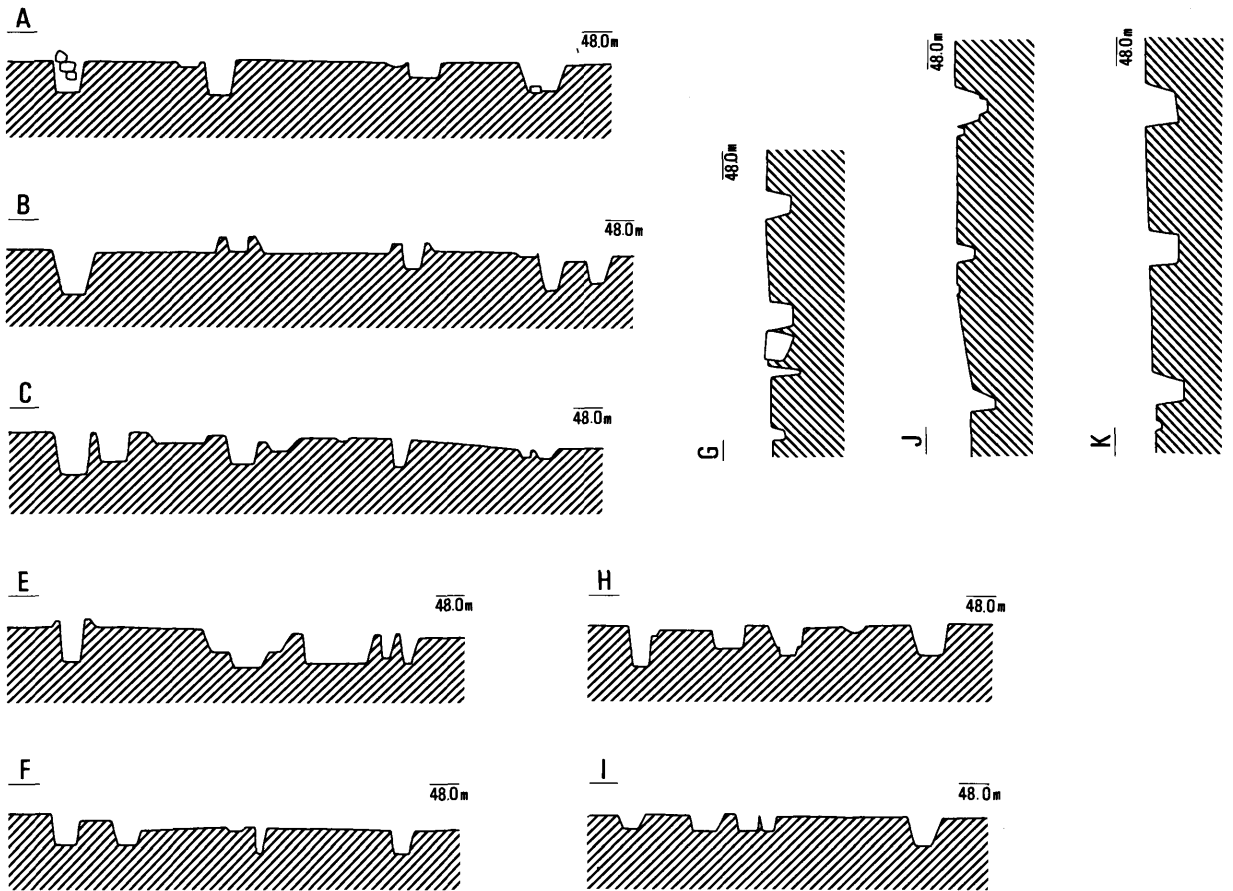
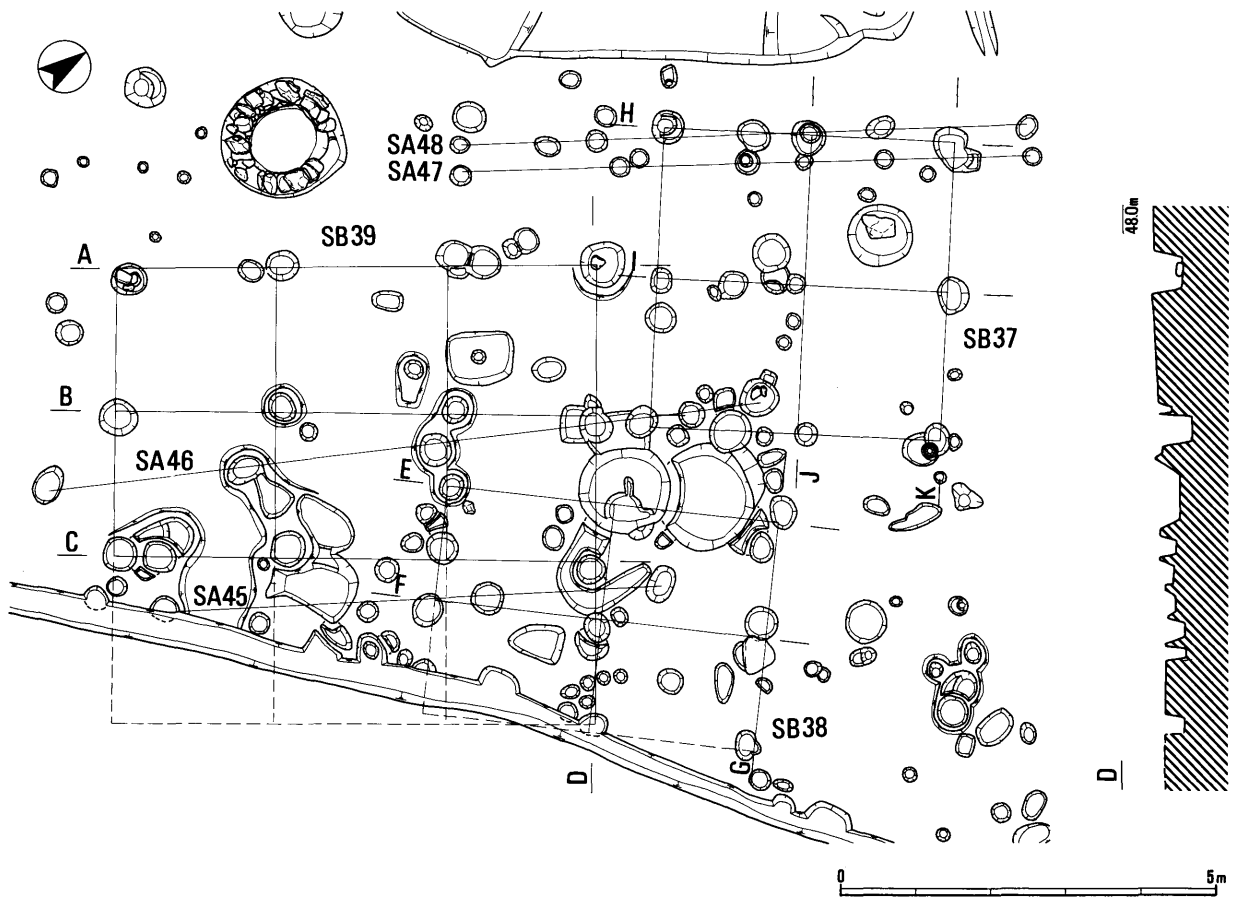
SA46 N54°Eの方向に4間(9.5m)分確認した。柱間は、2.5m程となる。柱穴の直径は、約0.45m。深さは、0.3~0.5mであるが、一部浅いものもある。ピットの中には根石があるものも見られる。切り



第9図 SK11実測図(1:40)



第10图 SD36・SB40・SB41実測図(1:100)



第11图 SB37・SB38・SB39 实测图 (1:100)

合い関係からSB39より古い時期のものである。

SA47 N60° Eの方向に4間(7.5 m)続く。柱間は、2 m。柱穴の直径は、0.25~0.3m、深さは0.2~0.3 mである。

SA48 N61°Eの方向にSA47と同じく4間(7.5 m)続く。柱間は、2m。柱穴の直径は、0.25~0.45 m、深さは0.25~0.45 mである。

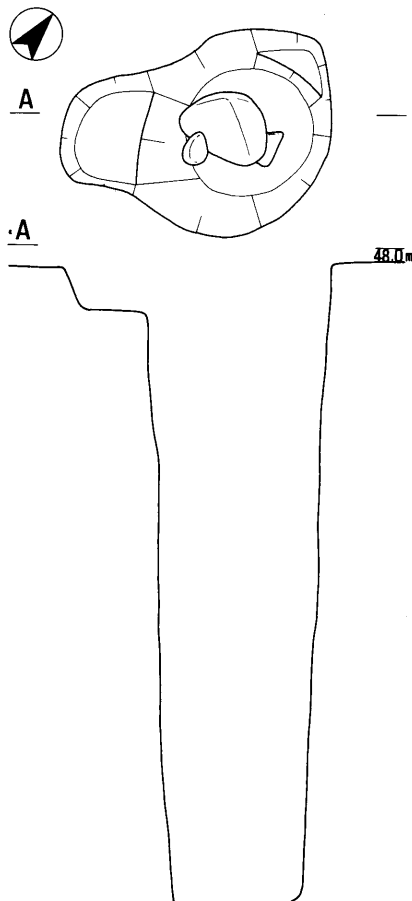
C 墓

A地区の東端の4ヶ所の土坑・小穴から中国銭が出土した。遺構の大きさ・深さ・形から疑問が残る所もあるが、刀子を伴うものもあり、他の場所からは銭は一切出土していない点などから墓と考える。時期は、4基とも掘立柱建物と同じ時期のものと思われる。

SX5 東西0.7m×南北0.9mの楕円形で深さは約0.15m。刀子とともに、古くは開元通寶(唐、621年初鑄)から永楽通寶(明、1408年初鑄)までの16枚が重なって出土した。

SX42 直径0.7 mのほぼ円形で、深さは0.15 m。SX5と同じく、古くは開元通寶(唐、621年初鑄)

SE14



から永楽通寶(明、1408年初鑄)までの16枚が重なって出土した。銭の穴には、紐も一部残っており、短い緡銭として埋められたのは確実である。

SX43 東西0.4 m×南北0.5 mのほぼ円形で深さは0.15m。天聖元寶(北宋、1023年初鑄)など5枚が重なって出土。

SX44 東西0.3 m×南北0.3 m、深さ0.1 m。元豊通寶(北宋、1078年初鑄)1枚が出土。

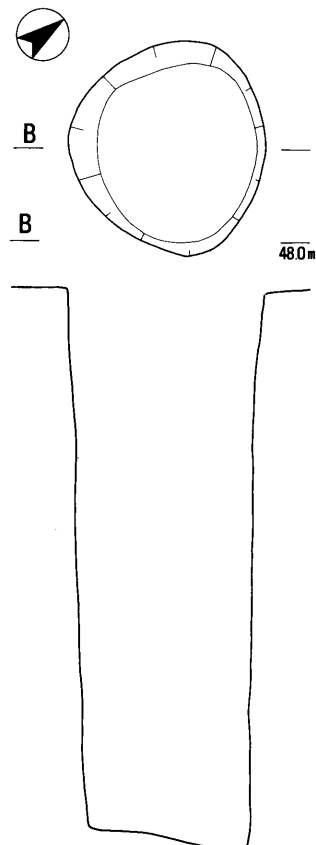
D 溝

4条の溝を検出した。いずれも東西に細長い調査区を北から南へ調査区外へ流れており、詳細は不明であるが、時期は、室町時代のもの江戸時代のものに分けられる。

SD1 A地区の東端を北西から南東方向へ流れる溝で、北端は後世の削平のため浅くなって途切れる。幅は0.9 m前後、深さは深い部分で0.15 m程である。埋土は、礫の混じる褐灰色土。出土した土師器の鍋より掘立柱建物と同じ時期の溝と思われる。

SD2 A地区西端を北から南へほぼ真っすぐに流れる溝でSD1と同じく、北端は浅くなって途切れ

SE19



第12図 SE14・SE19実測図(1:40)

る。幅は0.7m前後、深さは1 m程である。断面形状は逆台形を呈し、埋土は、礫混じりの灰黄褐色土・褐灰色土である。江戸時代の瓦が多数出土していることから19世紀の溝と考えられる。

SD10 掘立柱建物を取り巻くようにB地区の北端の丘陵の崖下を東から西に流れ、調査区ほぼ中央で南に迂回して調査区外へ流れる。幅は、0.7 m～1.3 mほどで深さは調査区南端で約1 m。溝の右側に裏込めを施された人頭大の石列が2 mほど続く箇所が2ヶ所遺存している。断面は、U字状を呈す。埋土は、0.05 m～こぶし大の礫を含む褐灰色土・黒褐色土である。遺物には、相鹿瀬廃寺の瓦などが混入しているが、陶器の鉢などの出土から19世紀前半の溝である。

SD17 SD10の西を並行するように流れる。他の遺構に切られていたり、削平されていたりして詳細は不明だが、断面では2つの溝が切りあっており、掘り替えを行ったことが伺える。遺存部分の幅は、調査区南端で最初の溝が幅約0.8 m。深さは0.7 m、

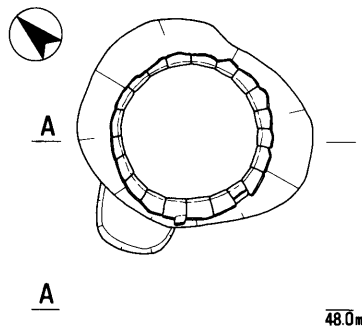
断面形状は逆台形。後出の溝は、調査区南端で幅0.75 m、深さ0.6 m、断面はU字状を呈す。埋土は、両方とも礫の混じる暗褐灰色土だが、最初の溝には黄褐色土粒が入る。出土した土師器の鍋から掘立柱建物と同じ時期の溝と考える。

E 井戸

4基の井戸を検出した。1基のみ石組みがあり、残りの3基は素掘りで、内1基については桶の底を抜いて井戸枠とした木製品が遺存していた。なお、当地では井戸を廃棄するときは、井戸枠は抜き取るという風習があり、残りの井戸についても何らかの井戸枠があった可能性がある。

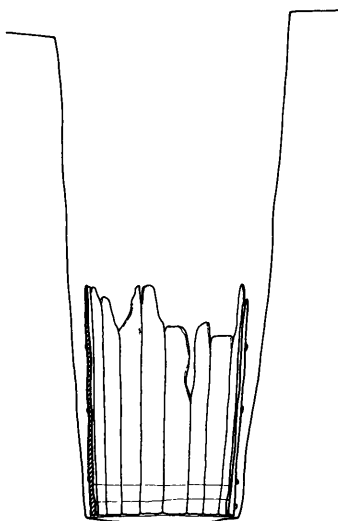
SE14 A地区の南西端に位置する素掘りの井戸である。掘形は直径1.1 mのほぼ円形で深さは3.4 mで千枚岩の岩盤に達する。埋土上層から投げ入れられた状況の人頭大の石が10個出土。底部から見つかった土師器の高台付小椀などから掘立柱建物と同じ時期の井戸と考える。

SE20

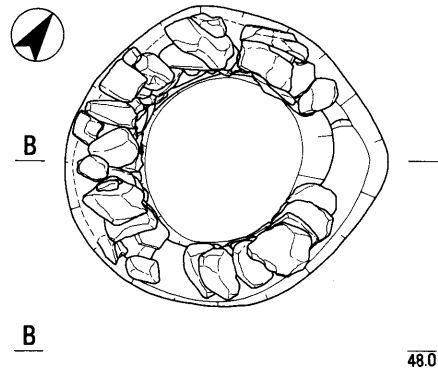


A

48.0m

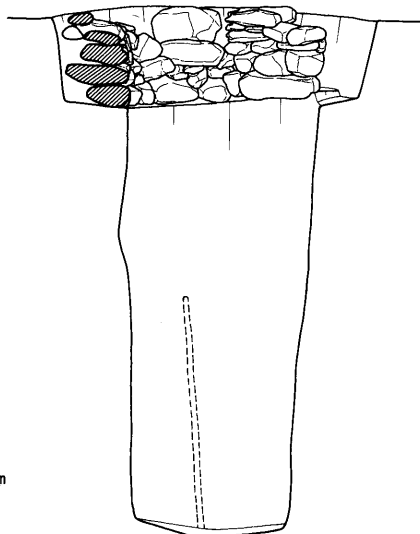


SE32



B

48.0m



0 1m

第13図 SE20・SE32実測図(1:40)

SE19 B地区の東端で検出。掘形は、直径1.1mのほぼ円形。深さは約3mで千枚岩の岩盤に達する。底部近くで人頭大の石が7～8個見つかり、廃棄後に投げ入れられたものと思われるが、井戸枠の外側を固定していた石である可能性もある。埋土から陶器の片口が出土し、19世紀前半代の井戸と考える。

SE20 B地区東部北寄りに位置し、SD17を切っている。掘形は、直径1.2mのほぼ円形で、深さは約2.7mで千枚岩の岩盤に至る。底部に幅0.12～0.13m、長さ1.3mほどの板を21枚使用して作った底径約0.8mになる桶の底を抜いた井戸枠が遺存していた。出土した湯呑み・摺鉢などから19世紀前半代の井戸と考える。

SE32 B地区のほぼ中央にある、上端部のみ人頭大の偏平な川原石を使った石組みの井戸である。深さ2.8mで千枚岩の岩盤に達する。石組みは、掘形直径1.6mの円形で、深さ0.5mで平坦な段をなし、その下は内径1mほどの素掘りとなる。石組みは、偏平な0.2～0.4m程の大きさの石が使われ、最上段部内径は、0.85mである。土器がほとんど出土せず、使用された時代は特定できないが、底部から

菼民将来札と、廃棄後の井戸内部の「息抜き」とされる竹筒が突き刺さった状態で出土した。

F 土坑

B地区を中心に形や大きさ、深さ、時期がさまざまな土坑がいくつか検出された。主なものについて記す。

SK22 B地区中央北寄りの掘立柱建物群の中にあり、直径約1.5mの円形で深さは約0.4m。断面形状は盥形。19世紀前半代の摺鉢が出土している。

SK23 SK22と切りあっており、SK22を掘り替えたものと思われる。直径1.2mの円形で深さは約0.3m。断面形状は盥形。19世紀前半代の染付皿などが出土している。

SK26 B地区西方にあり、土坑本体は東西4m、南北3mで、最深部の深さは1.1m。底からは湧水があった。土坑本体とつながった溝が調査区外南へ伸びる。埋土からは人頭大の石10数個とともに、整理箱にして7箱分の土師器の鍋等が出土し、16世紀後半の調整池のような役目をした土坑と思われる。

IV. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして50箱であった。これらの遺物は、下層の縄文時代以前・上層の縄文時代・奈良時代・室町時代後期・江戸時代に分けられる。下層の縄文時代以前の遺物の詳細については今後の課題とし、本書では、縄文時代以降の特徴的な遺物について器種別に概略を述べたい。なお個々の遺物の詳細については、遺物観察表を参照されたい。

(1) 下層出土石器類

A地区・B地区合わせて下層約150㎡について調査を行い、総計479個のフレイク・石核・こぶし大の礫・碎片などが出土した。

以下に大まかな特徴をまとめると次のようになる。

①火を受けたと思われる物も含む30個ほどのこぶし大の砂岩の礫群を除くと、フレイク、破片などは数個のサヌカイトや頁岩製のもの以外、すべてチャート製である。

②フレイクの中には、縦長剥片がいくつか含まれるが、明確に道具と認定できるものは見当たらない。特に石鏃の未製品らしきものは全く見られない。

③下層からは土器の出土が皆無である。

現在、これらの石器群の時代は、上記の特徴からだけでは比定出来ずにいる。しかし、遺物出土の中心となった明黄褐色粘質土の直上の層には、テフラと思われるブロックが見られ、今後、いろいろな角度から更に細部の検討を加えて時代の比定をしたい。

(2) 縄文土器

1は、風倒木の跡から出土した、船元・里木式と思われる深鉢の山形口縁部である。外面は、刻目隆帯を施し、篋描文の後、円形刺突文を弧状に多用している。内面には、口縁端部に縄文が見られる。2も、風倒木の跡から出土した縄文土器の体部で、外面は斜め方向に縄文、内面は、横方向に条痕が施されている。時期は、不明である。

(3) 土師器類

① 小皿類

3は、B地区包含層からの出土の小皿で全体につまみ上げて成形後、内面のみナデが施されている。5はSD2からの出土で、3と同類だが内面には全体に二次的炭化物が付着していた。4は、B地区のピットから出土した小皿で、つまみ上げて成形後、内面と口縁部の外面のみナデが施されている。口縁端部は、内湾している。6はSK22、7はSK23からの出土の同類のもので、つまみ上げて成形後、内外面ともにナデを施す。7の小皿は、口縁端部に油煙痕を有す。8は、高台付小皿でSD17から出土した。高台は底部に貼り付けた後、つまみだして成形している。3～7の遺物については時期はよくわからないが、8は室町時代後半のものと思われる。

② 茶釜類

9は、SD10から出土した耳付きのものである。交差のハケを施した外面頸部の下に耳を付けた後、その接部にもハケを施している。内面頸部より下にもヨコハケがあり、その後のユビオサエが確認できる。10は茶釜の蓋で、11・12とともにSK26から出土した。11・12は外面ハケメ、頸部外面から内面にかけてはヨコナデが施されており、口縁端部の断面はY字形を呈する。時期は、いずれも16世紀後半のものと思われる。

③ 鍋類

13は、浅い鍋の体部上方に内側から穴をあけ、注口状のものを鍋底面に対して平行につけたもので、外面にはススが残っている。形は十能に似るが、どのように使用されたのかは不明である。14・15は、伊藤裕偉氏の編年による南伊勢系土師器鍋の第4段階にあたるものの小型鍋で、同じく16・17は、第4段階にあたる中・大型の鍋である。いずれもSK26の出土で室町時代後半のものと思われる。

④ 甕

18は常滑産と思われる甕で、口縁部内面に内端と呼ばれる張り出しを持つ。底部は欠損しており、底を抜いて井戸杵として使用されていたと考える。SK12で19世紀前半の陶器類とともに廃棄されており、その時期のものと思われる。

(4) 陶器類

以下に記述する陶器類のほとんどは、19世紀前半代の瀬戸産のものである¹⁶。19～26は、SD10からの出土遺物である。19は、瀬戸の染付箱型湯呑で、体部下方が屈折し、上方はほぼ直立する。高台は低く、高台径が狭いのが特徴。20は、体部下方が丸味を帯び、上方がやや外反する瀬戸の端反碗である。21は、同じく瀬戸の天目茶碗で高台周辺を除き、内外面ともに施釉されている。22も、同じく瀬戸の片口小鉢で小型の丸碗形のものの1ヶ所に短い樋状の片口が付される。23は練鉢で、立ち上がりが強く、口縁部が外折する。外面底部に「五分式□」の墨書があり、瀬戸のものである。24は、染付の皿で内外面ともに体部と底部との境に同心円状に圈線が引かれる。25は茶瓶で、外面は底部周辺を除き黒色の釉がかかる。脚は3脚ある。26は、瀬戸の19世紀前半の摺鉢で口縁直下がやや凹み、内面に段が形成される。

27～30は、SK12から出土した。27は、瀬戸産の箱型湯呑で19と同じく体部下方から上方が直立する。28・29は、高台の幅が広い染付の碗で産地は不明である。30は、瀬戸の輪花の皿で口縁部を所々指でつまんでいる。内面底部中央に菊の押印文がある。31・32は、SE20の出土遺物で瀬戸産である。31は体部内面に櫛描きによる同心円と波状文が施された鉢である。32は、文様を彫り込んだ回転施文具を用い、体部に連続文様を施した湯呑である。33・34はSK26からの出土である。33は卸し皿で、体部外面は回転ナデによって段が形成されている。口縁端部のみ釉がかかる。16世紀の後半のものと思われる。34は摺鉢で、口縁端部は、折り返され縁帯が形成される。17世紀に入り込む可能性が高いものである。35は、SE19出土の大きな片口で、口縁は内側に折り返される。底部内面に3ヶ所のトチン跡が残る。36は、SK23の出土の染付皿で内面底部中央には、五弁花が描かれる。37は、風倒木跡から出土した紅皿で小さい蔓のような文様が見られる。38は、包含層出土の天目茶碗で、外面の高台周辺を除き黒褐色の釉が施されている。

(5) 瓦類

39～41は、奈良時代の古瓦である。39は、単弁重弁八葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当部が1/4ほど欠

落しているが、瓦当径14.6cm、内区径12.0cm、中房径4.3cmである。弁端に切り込みがあり、子葉の輪郭線はつながっている。中房の蓮子は1+6個で、外区の珠文は21個になると思われる。40は、同じく単弁重弁八葉蓮華文軒丸瓦だが、文様の磨滅が激しい。瓦当径15.3cm、内区径12.0cm、中房径4.6cmである。39と違うのは蓮弁に広がりがなく、中の子葉も小さい点で、そのために蓮弁と蓮弁の間隔が広く感じられる。子葉の輪郭線がつながっているのは39と同様である。中房の蓮子の数はよくわからないが、外区の珠文は16個になると思われる。41は、丸瓦で凹面に11~12本/cmの布目痕が明確に残っている。39・40の軒丸瓦は、これまで見つかっている逢鹿瀬廃寺の出土瓦と同範と思われ、41も含め従来指摘されているように逢鹿瀬廃寺の北北東約1500mにある西谷遺跡（柄ヶ池瓦窯）から供給された可能性が強い。42の軒平瓦は、中心飾りに蓮華をおき、そこから唐草が伸びる文様だが、いぶしはかかっておらず、中世のものと思われるが詳細な時期は不明である。

43~45は、江戸時代の瓦である。43は、一部欠損しているものの瓦当部の径15.2cm、厚さ2.4cm、内区径11.7cmの軒丸瓦で、内区は3尾の巴と11個の珠文で構成されている。44は、3分の1程しか遺存していない。瓦当部の径推定16.4cm、厚さ2.0cm、内区径推定11.4cmの軒丸瓦で、内区は、43と同じく3尾の巴と11個の珠文で構成されているが、巴・珠文ともに一つ一つが大きく隆起している点が43と異なっている。43より新しい時期のものと考えられる。45は、3尾の巴文と9個の珠文、唐草文で瓦当部を飾っている軒棧瓦である。

(6) 井戸出土の木製品

47・49は、SE32からの出土である。47は、

高さ22.8cm、幅4cm、厚さ6mmのヒノキ板を使った呪符木簡である。上端に両側からのえぐりが見られ、下端は方形に終わる。表面は、上端に4点の墨痕が内側に向かって記してあり、その下に「蕪民将来子徒也」の文字が墨書されている。裏面には、下方にセーマンが記されている。セーマンの中央を横切るように幅6~7mmのわずかな凹みが見られる。49は、菱形の板の中央に直径4.5cmほどの穴が開いている木製品で、用途は不明である。材質は黒マツである。48・50は、SE20からの出土で48は手斧の柄と思われ、先端に鉄製品を装着して使用されたと思われる。材質は、椿である。50は、高さ約1.4m、径0.80~0.85mの井戸枠で、底部に2ヶ所、中央に1ヶ所、上方に1ヶ所、竹を編んだ籠がはめられていた。また、一枚一枚の板の両側面にも、一カ所、両端が尖っている竹クギが打たれ、隣接する板同士を結合している。底部内面が、わずかな段をなしてやや肥厚しているところが元来、桶として作られたものであることと思わせる。本体は、サワラを使用して作られている。

(7) 中世墓出土の遺物

46はSX5出土の刀子で、錆び落とし後、刃先に繊維状のものが付着しているのが判明した。51~88は銅銭で、全部で38枚が出土した。SX5とSX42ではそれぞれ16枚が重なって出土している。SX43では5枚が重なったものが1つ見つかっているが、いずれも錢種・表裏などに特に意図的な配列は認められない。SX44からは、1枚だけ出土している。錢種別では、全38枚の内、多いものは皇宋通寶の6枚、永樂通寶の5枚、元豊通寶の4枚が挙げられる。錢種など詳細は、後記の一覧表を参照されたい。

V. 結 語

今回の内垣外遺跡遺跡の発掘調査において検出された遺構は、縄文時代以前から江戸時代末期まで及び、また、遺物も様々な特筆すべきものが出土した。以下に特徴のある遺構・遺物について若干考察したい。

(1) 縄文時代以前

① 下層出土石器について

下層から出土した石器群については、明確に道具と認定できるものが見当たらず、また、土器を伴っていないため時代の比定ができていない。ただ、同じ宮川流域で多くの石器が出土した遺跡と比べてみると、旧石器時代の遺跡である大台町出張遺跡では

アカホヤの降灰の下層で確認された遺物の使用石材はチャートが圧倒的である。これに対し、縄文時代の前期の度会町の下久具万野遺跡、後期～晩期の同町森添遺跡、伊勢市の佐八藤波遺跡では、いずれもサヌカイト製の石鏃の出土が多い。これらの点から内垣外遺跡の石器群は、旧石器時代の遺物である可能性が非常に強いと現時点では考えられる。

② 縄文時代の陥穴状土坑について

縄文時代の陥穴状の土坑は、県内では嬉野町天花寺の馬ノ瀬遺跡³⁴、青山町の勝地大坪遺跡³⁵、安濃町の西相野遺跡³⁶、飯南町の奈可切遺跡³⁷などで見つかっている。いずれも、内垣外遺跡のSK 11のように土坑底部中央に棒状の物を差し込んだと思われる小穴が見られる土坑で、複数の検出を見ている。時期は、馬ノ瀬遺跡、勝地大坪遺跡、西相野遺跡が縄文早期とされ、奈可切遺跡のものは中期とされる。内垣外遺跡でも縄文土器はSK 11以外にも包含層、風倒木跡から十数個見つかっているのだが、そのほとんどはSK 11のものと同様に無文の土器体部で、陥穴状土坑ともども時期の比定ができないのが残念である。

(2) 中近世

① 掘立柱建物について

多くの柱穴を検出したが、その中で6棟の建物を確認した。ほぼ同じ方向で建てられており、いずれも総柱建物の可能性があるなど、室町時代に建て替えられた建物と考える。これらの建物のうち、SE 14とSB 36、SD 17とSB 37～39などは不可分の関係であったと思われる。建物は、徐々に山陰を離れて宮川に近い南の方へと建て替えられ、現在の集落の場所へ移っていった。明治18年(1885)に作製された相鹿瀬村の古地図をみると、集落は既にほぼ現在の位置と変わらない。そして、かつて掘立柱建物があった付近に19世紀前半の人々によってSE 19・20やSD 2・10、SK 22・23などが作られたと思われる。

② 蕪民将来札と竹筒について

時期が特定できないSE 32から出土した「蕪民将来子徒也」の木札は、「我家は、蕪民将来の子孫なので守護してほしい」という厄除けの意味を持つ。県内では、四日市市の赤堀城跡³⁸、松阪市の阿形遺

跡³⁹・伊勢寺遺跡⁴⁰について4例目で、裏にセーマンと呼ばれる「☆」の記号が明確に確認できるものとしては、阿形遺跡について2例目となる。今回出土したような板状の「蕪民将来札」は、昨年度までの段階で全国21遺跡計41の出土例があったとされる。また、その遺跡の分布範囲は、茨城・新潟・静岡・京都・大阪・兵庫・三重の7府県に限られており、時期はいずれも古代の終わりから中世のものである⁴¹。三重県の南伊勢地方では、現在でも正月のしめ飾りを一年中玄関の上につけておく習慣があり、そのしめ飾りに「蕪民将来子孫門」と墨書された木札をつけたものが見られる。今回見つけたものは、その大きさなどから、しめ飾りに使用したとは思われないが、除災招福の役目を終えたあと、ある意味で格好の捨て場として井戸へ投げ入れられた可能性が考えられる⁴²。この木札と同じような役割を担ったと思われるものが、松阪市の奥ノ垣内遺跡から出土している。これは、一方に「御年徳大明神」、一方に「急々如律令」と墨書された木札で、18世紀頃の溝から出土しており、蕪民将来札との違いなど今後の課題となろう。SK 32ではこの他、径4cm、長さ79cmの節を抜いた竹筒が、井戸の内壁にもたれるように斜めに底に突き刺さっていた。同じような状況は、広島県の草戸千軒など他の全国の遺跡でも見られ、井戸を埋める時の呪術的なしきたりではないかとする説もある⁴³。このような竹筒について多気町周辺では、「息抜き竹」と呼び、井戸を埋めるときは、「井戸枠は必ず抜き取らねばならない」という言い伝えとともに現在も守られている。

内垣外遺跡の調査は、道路事業に伴うもので東西に細長い調査区の発掘であった。上層の遺構も下層の遺構も調査区の外に続くことは間違いない。特に下層については、B地区の石器出土集中地点の北側の丘陵の崖が前後2段になっており、手前の段と奥の段までの幅1mほどの範囲には未だ多くの石器が埋まっていると思われる。時代を特定する資料を欠く現状で、石器を製作した人々は、千枚岩の岩盤の崖の陰で何を行っていたのか興味は尽きない。

上層については、残念ながら同時期の遺構は確認できなかったものの当初予想したとおり、逢鹿瀬廃

寺に関連するものとして瓦が出土した。神宮寺が、なぜこの地に建立されたかについては、伊勢神宮内宮の真西にあたり、内宮も逢鹿瀬も奈良時代は同じ度会郡で、しかも山懐という立地条件も共通であることが指摘されている⁶⁹。この逢鹿瀬寺の創建以後、相鹿瀬の地は伊勢神宮との繋がりが強い地となっていく。『氏経卿引付』には「逢鹿寺御蘭」の記述が見え、永享元年（1452）に神領があったことがわかっている。江戸時代は、伊勢神宮と熊野三山を結ぶ熊野街道が通る集落として賑わい、近代になっても明治3年（1870）の皇大神宮御蘭貢物表に「相

可瀬御厨」として菖蒲・山芋などが献上されるなどその関係は長い。

今回の調査の契機となった道路事業は、相鹿瀬から紀州へ続く国道42号線までを対象としている。時を同じくして、内垣外遺跡の発掘調査中に相鹿瀬から伊勢へ向かう峠にある女鬼トンネルも、それまでの車が対向できないうす暗いトンネルから二車線の明るいライトが灯るトンネルに生まれ変わった。相鹿瀬の人々にとっては、非常に喜ばしい平成における熊野街道の変遷の一つである。

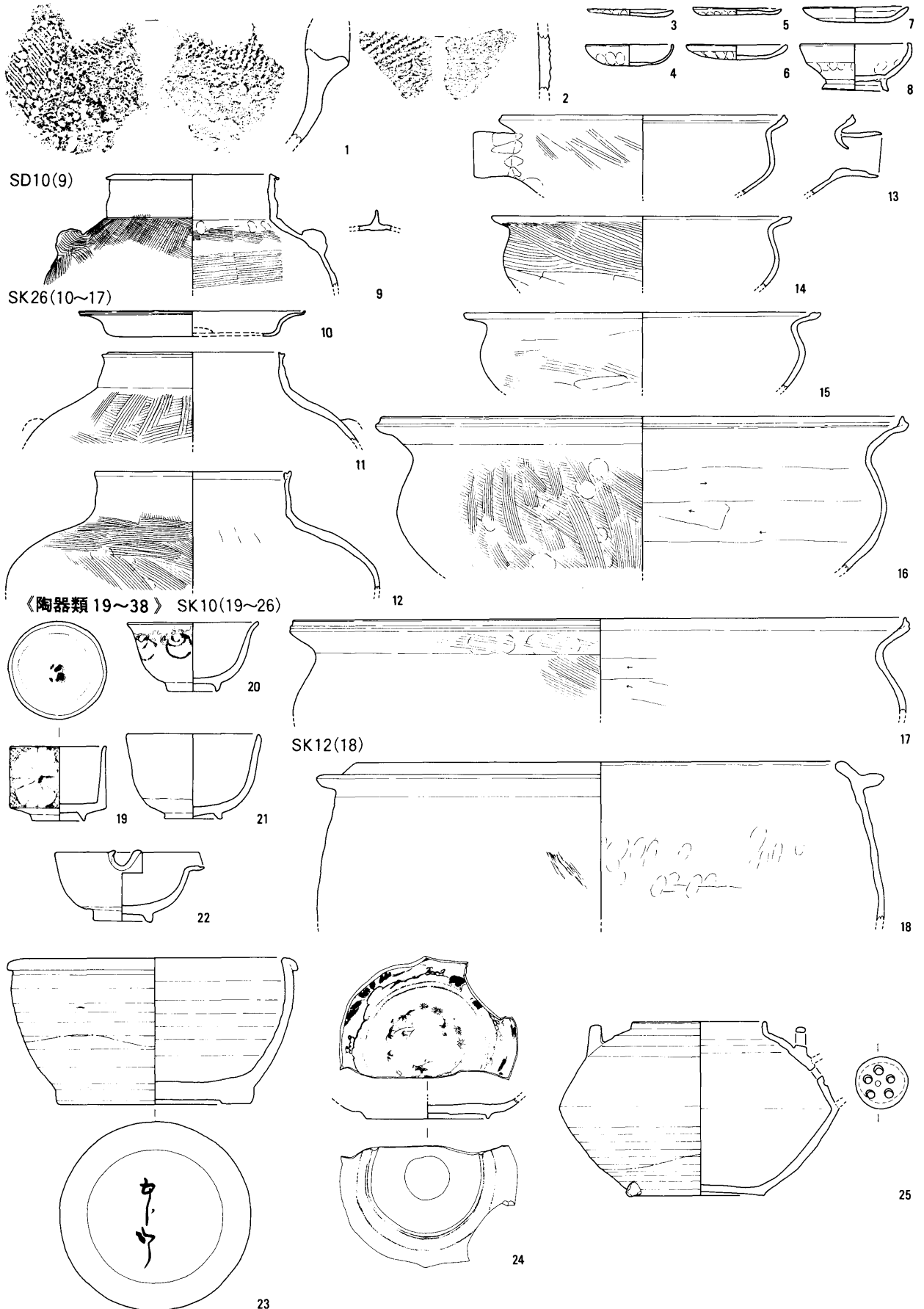
参考文献

- ① 松葉和也『山崎遺跡発掘調査概要』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。
- ② 奥 義次「三重県の遺跡」（『日本の旧石器文化3 遺跡と遺物くド』雄山閣、1984年）。
- ③ 松葉和也『高皿遺跡発掘調査概要』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。
- ④ 河瀬信幸「鴻ノ木遺跡」（『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』三重県埋蔵文化財センター、1991年）。
- ⑤ 小浜 学、西村修久「新徳寺遺跡-第1次」（『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』三重県埋蔵文化財センター、1995年）。
- ⑥ 奥 義次「第2編原始第1・2・3章」（『多気町史』、1992年）。
- ⑦ 下村登良男「第2編原始第4・5章」（『多気町史』、1992年）。
- ⑧ 「太神宮諸雑事記」（『群書類従』1）。
- ⑨ 松葉和也『森ノ上遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。
- ⑩ 越賀弘幸・林義巳『野田遺跡・研山遺跡発掘調査概要』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。
- ⑪ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』1、三重歴史文化研究会、1990年）。
- ⑫ 瀬戸市歴史民族資料館『研究紀要Ⅵ』（瀬戸市歴史民族資料館、1987年）。
瀬戸市歴史民族資料館『研究紀要Ⅶ』（瀬戸市歴史民族資料館、1988年）。
瀬戸市歴史民族資料館『研究紀要Ⅷ』（瀬戸市歴史民族資料館、1989年）。
『瀬戸市史 陶磁史篇四』（瀬戸市史編纂委員会、1993年）。
- ⑬ 河北秀夫「西谷遺跡（栃ヶ池瓦窯）・逢鹿瀬廃寺・四神田廃寺採集瓦の同范関係と想定される供給パターン」（『Miehistory』7、三重歴史文化研究会、1994年）。
- ⑭ 伊勢野久好「馬ノ瀬遺跡の調査」（『天花寺山』、志町・嬉野町遺跡調査会、1991年）。
- ⑮ 吉澤 良「勝地大坪遺跡（A・B地区）、勝地大坪古墳群」（『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告-第1分冊-』三重県埋蔵文化財センター、1992年）。
- ⑯ 『いにしへの安濃町展』（安濃町教育委員会・安濃町遺跡調査会、1995年）。
- ⑰ 西出 孝『奈可切遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。
- ⑱ 北野 保『赤堀城跡』（四日市市埋蔵文化財報告16四日市教育委員会、1986年）。
- ⑲ 福田哲也・石川隆郎「阿形遺跡」（『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター 1992年）。
- ⑳ 竹内英昭「伊勢寺遺跡」（平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告-第2分冊-』三重県埋蔵文化財センター、1991年）。
- ㉑ 嶋谷和彦「蘇民将来札の全国分布と蘇民将来信仰の展開」（『長曾根遺跡発掘調査概要報告』堺市教育委員会、1996年）。
- ㉒ 小林 秀「蘇民将来の呪符について」（『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター 1992年）。
- ㉓ 日榮智子『櫛田地区内遺跡群発掘調査報告Ⅱ奥ノ垣内地区』（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。
- ㉔ 水野正好「竹筒をのこした一井とその秘呪」（『草子千軒 N0.36』広島県草子千軒町遺跡調査研究所、1976年）。
- ㉕ 岡田 登「伊勢大神宮寺としての逢鹿瀬寺について」（『史料第85号』皇学館大學史料編纂所、1986年）。

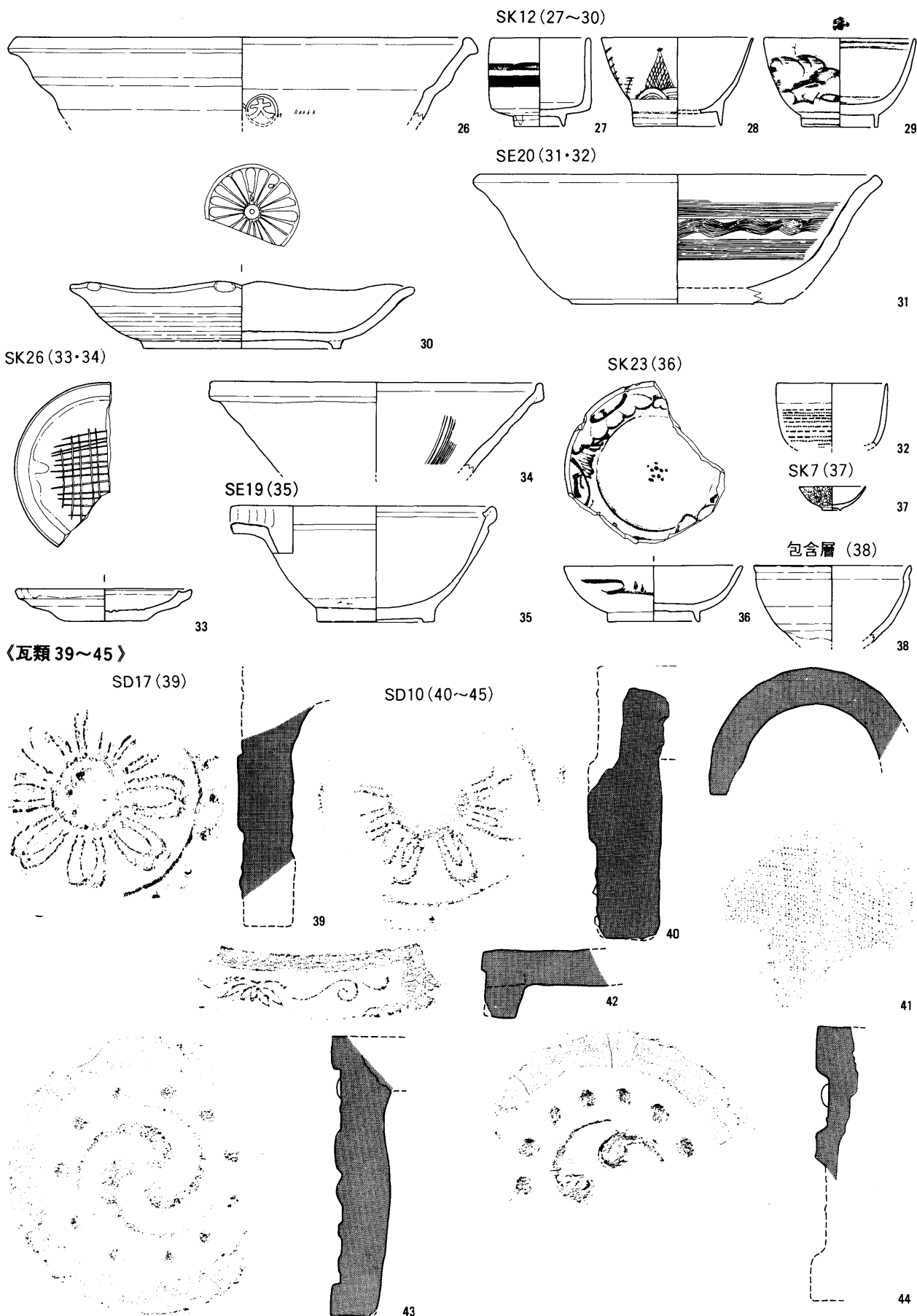
『三重県の地名』（日本歴史地名大系24 平凡社 1983年）

《縄文土器 (1・2)》

《土師器類 (3~18)》 包含層他 (3~8)



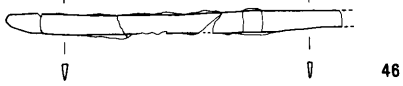
第14図 出土遺物実測図 (1) (1・2は、1:3、18は、1・8 他は1:4)



第15図 出土遺物実測図(2) (26~38は、1:4、39~44は、1:3)

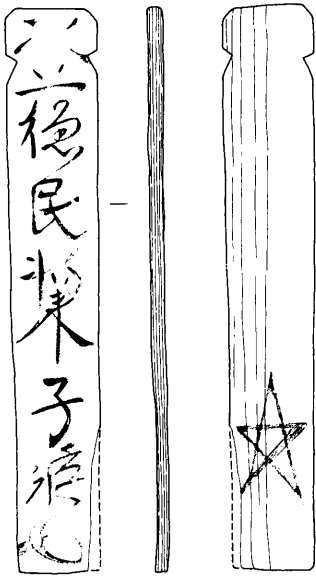


《木製品他 (46~50)》SK5(46)



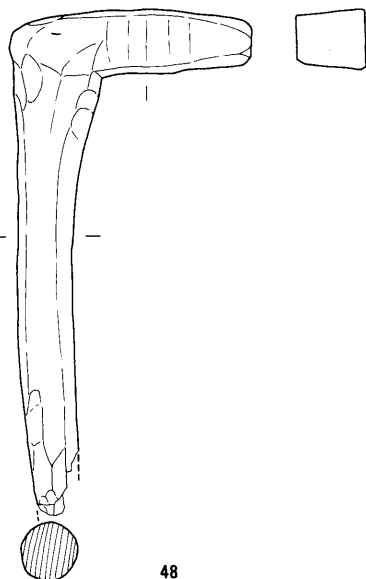
46

SE32(47・49)

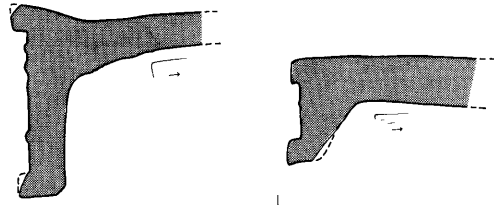


47

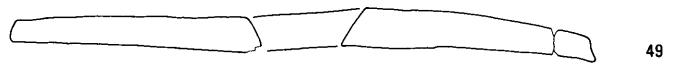
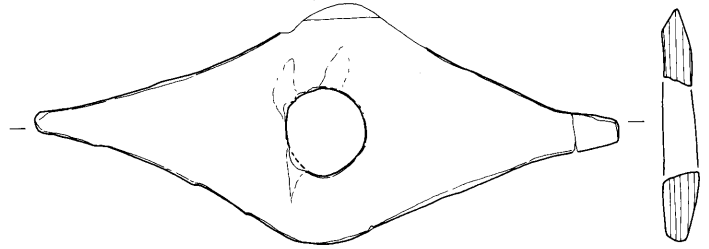
SE20(48・50)



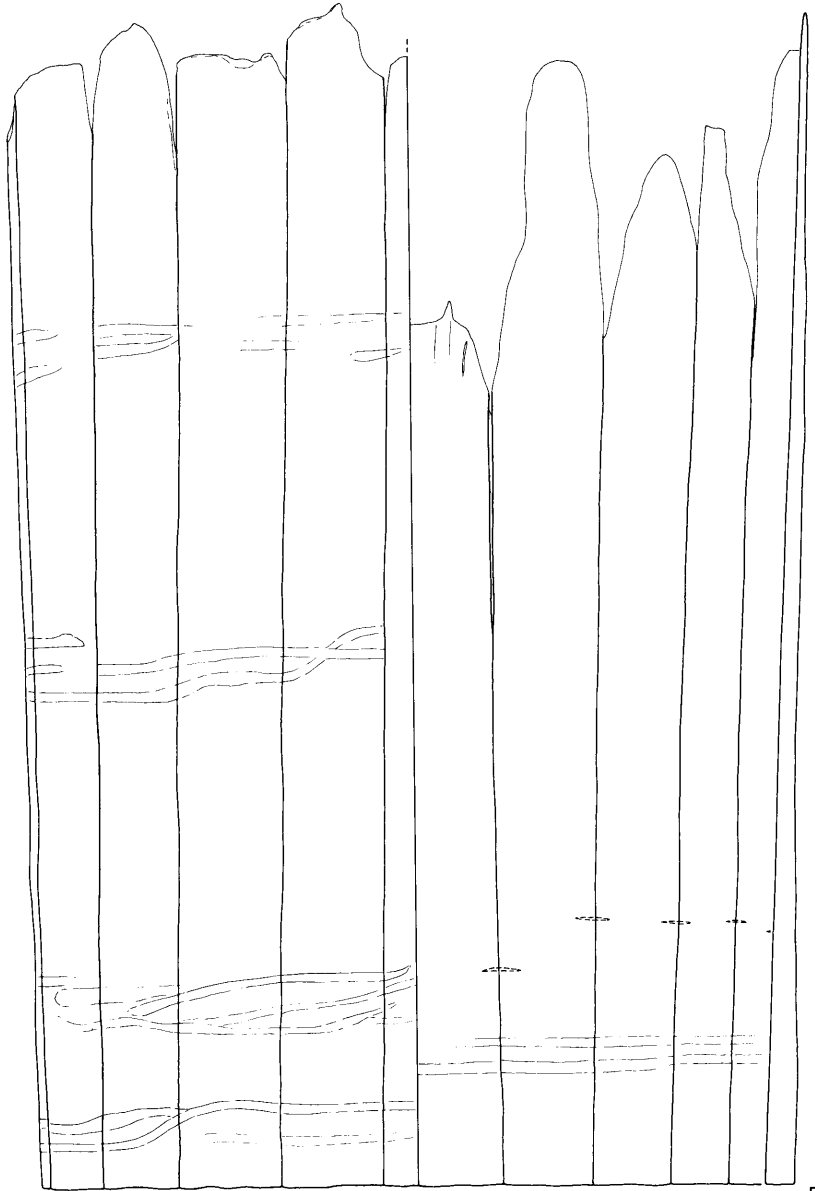
48



45



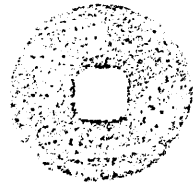
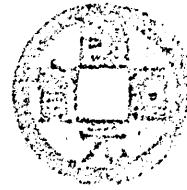
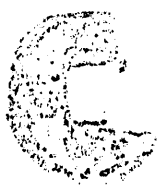
49



50

第16図 出土遺物実測図(3) (45・47は、1:3、50は、1:8 他は、1:4)

SX5 (51~66)



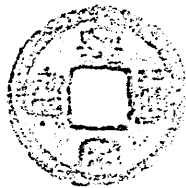
51

52

53

54

55



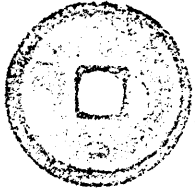
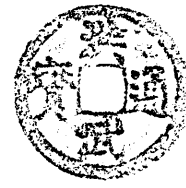
56

57

58

59

60



61

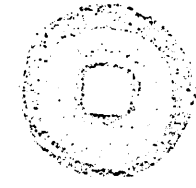
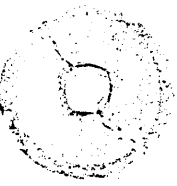
62

63

64

65

SX42 (67~82)



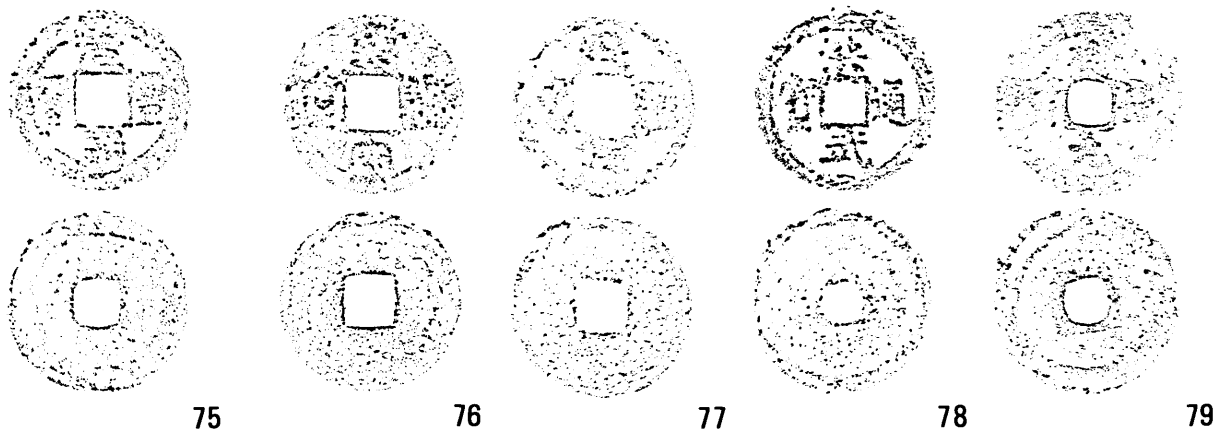
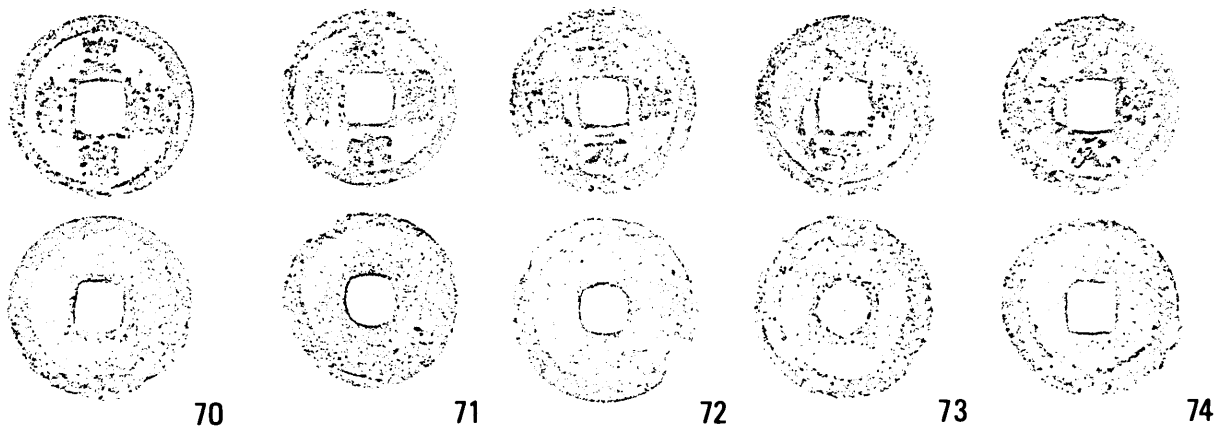
66

67

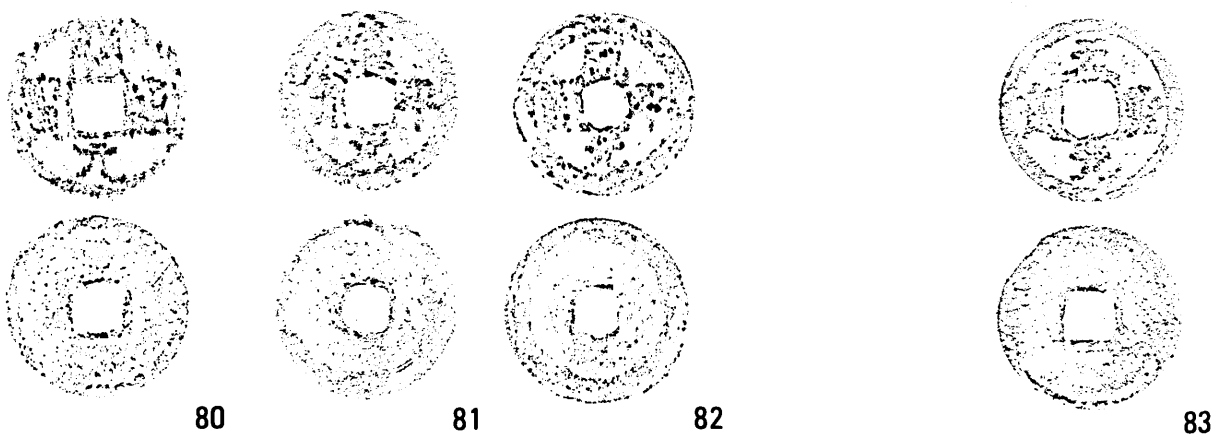
68

69

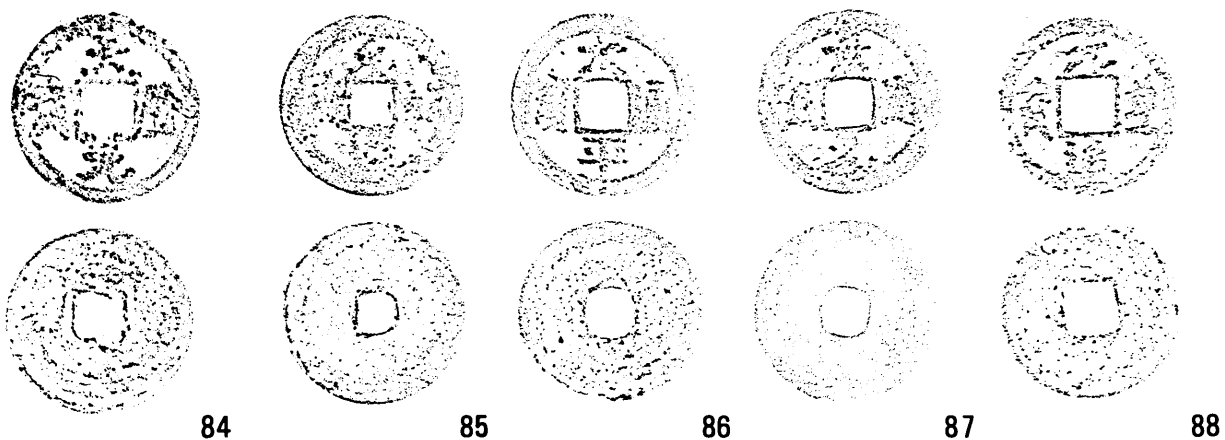
第17図 中世墓出土銭貨(1)(1:1)



SX43(83~87)



SX44(88)



第18圖 中世墓出土錢貨(2)(1:1)

図版番	登録 号番	器種号	出土位置		法量 (cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
1	002-03	縄文土器 口縁部	A地区	風倒木跡			外面：刻目降帯、窠描文ののち、円形刺突文 内面：縄文	～2mmの微砂含む	やや軟	黄褐色	小片	船元・里木式
2	002-04	縄文土器 体部	A地区	風倒木跡			外面：縄文 内面：条痕	～2mmの微砂含む	ふつう	褐色	小片	
3	021-04	土師器 小皿	B地区	包	6.2cm	0.5cm	外面：ユビオサエ 内面：ナデ	～1mmの砂粒をわずかに含む	良	外面：褐色 内面：淡褐色	完形	
4	021-06	土師器 小皿	B地区	pit1	6.2cm	1.6cm	外面：ユビオサエのちナデ 内面：ナデ	～1mmの砂粒をわずかに含む	良	浅褐色	4/5	内面の口縁部、外面に黒斑あり
5	021-05	土師器 小皿	A地区	SD2	6.3cm	0.5cm	外面：ユビオサエ 内面：ナデ	～1mmの砂粒をわずかに含む	良	灰色	完形	内面に二次的炭化物あり
6	021-03	土師器 小皿	B地区	SK22	7.2cm	1.1cm	外面：ユビオサエのちナデ 内面：ナデ	～1mmの微砂粒含む	良	にぶい橙色	完形	口縁部2カ所に油煙痕あり
7	021-02	土師器 小皿	B地区	SK23	7.6cm	1.1cm	外面：ユビオサエのちナデ 内面：ナデ	～1mmの微砂粒含む	良	橙色	完形	口縁部に油煙痕あり
8	021-01	土師器 高台付小皿	B地区	SD17	8.2cm	3.4cm	外面：ヨコナデ、貼り付け高台 内面：ヨコナデ	～1mmの細砂粒をわずかに含む	良	にぶい橙色	ほぼ完形	全体に黒斑あり
9	021-08	土師器 茶台	B地区	SD10	11.2cm		外面：ヨコナデ、ハケメ 内面：ヨコナデ、ヨコハケのちユビオサエ	密	良	にぶい黄褐色	1/2	
10	017-03	土師器 土蓋	B地区	SK26	16.3cm	3.8cm	外面：ナデ 内面：ナデ	密	ふつう	浅黄褐色	口縁部 3/10	
11	017-02	土師器 茶台	B地区	SK26	12.3cm		外面：ハケメのちヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	ふつう	浅黄褐色	口縁部 9/10	内面は風化大
12	017-01	土師器 茶台	B地区	SK26	14.2cm		外面：ハケメのちヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	浅黄褐色	口縁部 1/2	外面にスス付着
13	020-01	土師器 注口付	B地区	SK26	20.4cm		外面：ハケメのちヨコナデ、ケズリ 内面：ヨコナデ	密	良	浅黄褐色	口縁部 3/10	
14	019-02	土師器 土師鍋	B地区	SK26	21.6cm		外面：ハケメのちヨコナデ、ケズリ 内面：ヨコナデ	密	良	浅黄褐色	口縁部 2/5	
15	019-03	土師器 土師鍋	B地区	SK26	25.6cm		外面：ハケメのちヨコナデ、ケズリ 内面：ヨコナデ	密	良	浅黄褐色	口縁部 1/5	
16	018-01	土師器 土師鍋	B地区	SK26	37.8cm		外面：ハケメのちヨコナデ 内面：ヨコナデ、1具によるナデ	密	ふつう	浅黄褐色	口縁部 1/2	外面にスス付着
17	018-02	土師器 土師鍋	B地区	SK26	44.4cm		外面：ハケメのちヨコナデ 内面：ヨコナデ、1具によるナデ	密	ふつう	浅黄褐色	口縁部 ほぼ完形	外面にスス付着
18	003-01	土師器 土師甕	B地区	SK12	70.0cm		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ユビオサエ	～0.1mmの砂粒など含む	ふつう	浅黄褐色	口縁部 1/2	
19	001-08	陶製付箱型湯 呑	B地区	SD10	7.0cm	5.4cm	外面：菊花と斜格子の呉須絵 内面：底部中央に五弁花の呉須絵、口縁部と底部に横線	密	堅緻	釉：透明器：灰白色	ほぼ完形	瀬戸産
20	001-01	陶製反 碗	B地区	SD10	5.1cm	9.5cm	外面：宝珠文と呉須絵、鉄絵 内面：施釉	密	良	釉：透明器：灰白色	完形	瀬戸産
21	001-07	陶製大目茶 碗	B地区	SD10	9.6cm	6.2cm	外面：底部周辺除き鉄釉 内面：鉄釉	密	堅緻	釉：褐色器：白色	完形	瀬戸産
22	001-02	陶製片口小 鉢	B地区	SD10	10.8cm	5.1cm	外面：底部周辺除き鉄釉 内面：柿釉	密	堅緻	釉：黒褐色器：灰白色	完形	瀬戸産
23	015-01	陶製練 鉢	B地区	SD10	21.2cm	10.6cm	外面：ケズリ出し高台、上半部灰釉 内面：灰釉、一部緑釉、五脚のトチン痕	1～5mmの砂粒をわずかに含む	堅緻	釉：淡黄白色器：白色	13/20	瀬戸産 底面に墨書
24	001-03	磁器 皿	B地区	SD10			外面：同心円 内面：松竹梅	密	堅緻	釉：透明器：白色		染付
25	014-02	陶製茶 瓶	B地区	SD10	9.6cm	12.6cm	外面：底部周辺除き鉄釉、3脚 内面：錆釉	1～3mm程度の砂粒をわずかに含む	堅緻	釉：黒色器：灰白色	4/5	
26	002-05	陶製掃 鉢	B地区	SD10	32.4cm		外面：錆釉 内面：錆釉	密	ふつう	釉：にぶい赤褐色器：淡黄色	口縁部 1/20	瀬戸産内面に「大」の刻印
27	006-01	陶製箱型湯 呑	B地区	SK12	7.0cm	6.6cm	外面：呉須絵と鉄絵 内面：施釉	密	良	釉：透明器：灰白色	3/5	瀬戸産
28	007-03	磁器 碗	B地区	SK12	11.0cm	6.5cm	外面：呉須絵 内面：施釉	密	堅緻	釉：透明器：明青灰色	1/4	
29	007-05	磁器 碗	B地区	SK12	10.8cm	6.5cm	外面：呉須絵 内面：施釉	密	堅緻	釉：透明器：明青灰色	2/5	
30	008-01	陶器 皿	B地区	SK12	24.4cm	4.9cm	外面：錆釉 内面：錆釉	密	良	釉：明褐色器：灰白色	1/4	内面底部に菊花押印
31	007-01	陶器 鉢	B地区	SE20	28.8cm	9.4cm	外面：灰釉、部緑釉 内面：鉄釉	～0.2mmの粗砂含む	ふつう	釉：浅黄色器：灰白色	4/5	外面底部と内面底面に着物
32	001-05	陶製湯 呑	B地区	SE20	8.2cm		外面：筋釉と鉄釉の掛け分け、螺旋状の連続文様を施す 内面：鉄釉	密	良	釉：黒褐色器：暗灰色		瀬戸産
33	016-01	陶製卸 皿	B地区	SK26	12.8cm	2.4cm	外面：底面に糸切り痕 内面：錆釉	1～4mm程度の砂粒をわずかに含む	堅緻	薄茶褐色	2/5	口縁部に炭水化物物付着
34	007-02	陶製掃 鉢	B地区	SK26	23.8cm		外面：錆釉 内面：錆釉	～0.3mmの礫含む	ふつう	釉：暗赤灰色器：灰白色	口縁部 1/2	瀬戸産
35	007-04	陶製片口 器	B地区	SE19	17.0cm	8.45cm	外面：底部周辺除き灰釉 内面：灰釉	密	ふつう	釉：透明器：灰白色	3/5	瀬戸産
36	005-01	陶製染付 器	B地区	SK23	12.8cm	4.1cm	外面：呉須絵 内面：半菊文の呉須絵、底面に五弁花の呉須絵	並	良	釉：透明器：灰白色	3/5	瀬戸産
37	001-06	磁器 紅	A地区	風倒木跡	2.9cm	1.75cm	外面：施釉 内面：施釉	密	良	灰白色	3/5	瀬戸産
38	001-04	陶製天目茶 碗	A地区	包	11.6cm		外面：底部周辺除き鉄釉 内面：鉄釉			釉：黒褐色器：白色		瀬戸産 天目茶碗
39	014-01	軒丸瓦	B地区	SD17			瓦当：単弁重弁八葉蓮華文 瓦当内面：ナデ	1～2mm程度の砂粒をわずかに含む	軟	外面：浅黄色 内面：褐色	瓦当 7/10	
40	009-01	軒丸瓦	B地区	SD10	13.8cm		瓦当：単弁重弁八葉蓮華文 瓦当内面：ナデ		ふつう	にぶい黄褐色	瓦当 3/5	
41	002-02	丸瓦	B地区	SD10			外面：ヘラケズリ 内面：布目圧痕あり	～0.3mmの砂粒含む	ふつう	褐色		
42	002-01	軒平瓦	B地区	SD10	幅 3.6cm		瓦当：均整唐草文 内面：ナデ、ケズリ	～0.2mmの砂粒含む	軟	青灰色	瓦当 1/2	
43	009-03	軒丸瓦	B地区	SD10	15.4cm		瓦当：左巻ツツ巴文、珠文帯、圈線 瓦当内面：1具による刻目		やや軟	青灰色	瓦当 4/5	

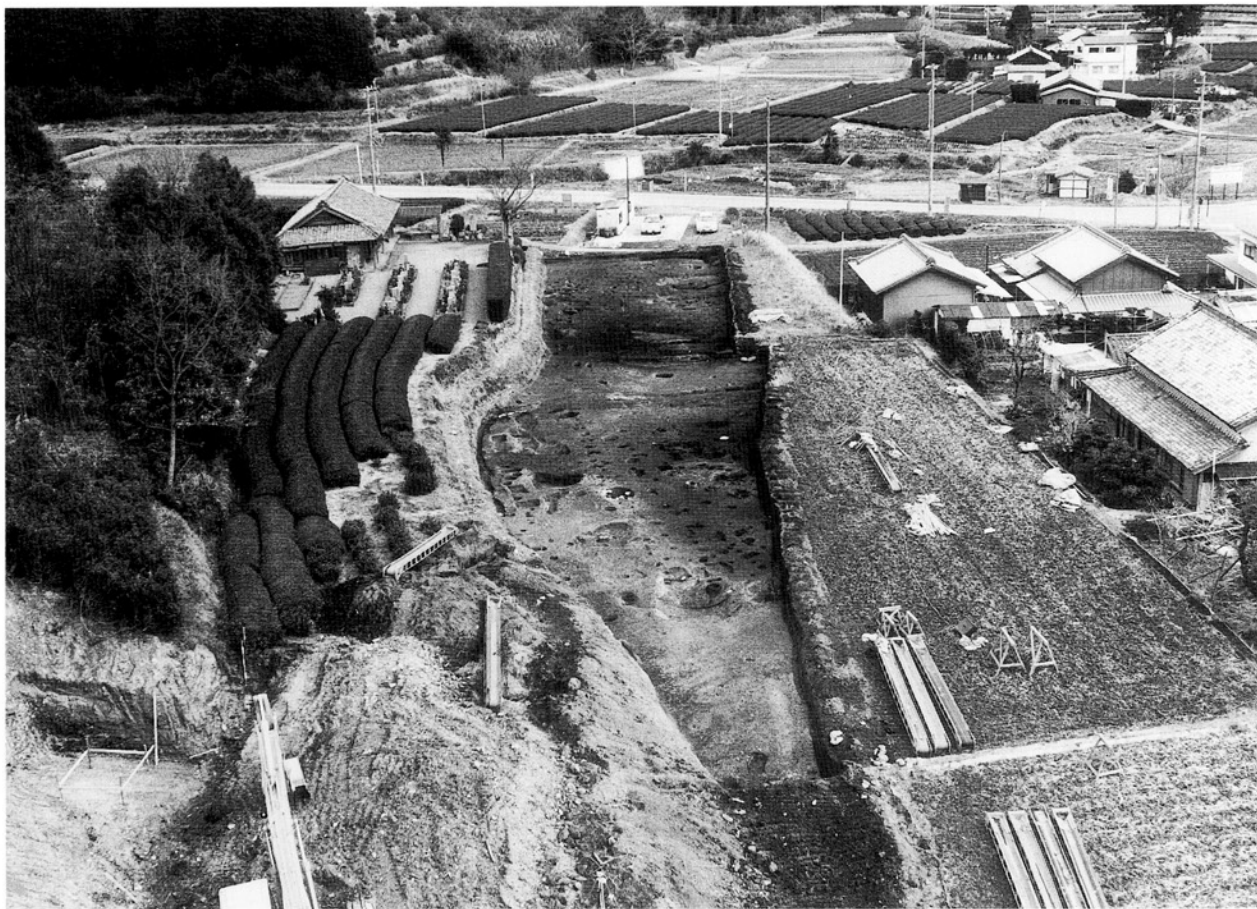
図版番号	登録番号	器種号	出土位置		法量 (cm)		調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
44	009-02	軒丸瓦	B地区	SD10			瓦当：右巻三ツ巴文、珠文帯、圏線 瓦当内面：工具による刻み目	～6.0mmの砂粒含む	良	青黒色	瓦当 1/2	
45	009-04	軒棧瓦	B地区	SD10			小巴：右巻三ツ巴文、珠文帯、圏線 垂れ：均整唐草文、内面：ケズリ		やや軟	暗青灰色	小巴4/5 垂れ2/5	
46	004-01	鉄刀製品	A地区	SX 5	現存 17.8 cm	幅 4.0 cm						
47	022-01	木製品	B地区	SE 32	長さ 22.8 cm	幅 3.6 cm						表裏：亀形押子痕也 裏面：セーマン
48	024-01	木製品	B地区	SE20			表面：工具によるあたり・ケズリ					
49	023-01	木製品	B地区	SE 32								
50	025-01	木井戸枠	B地区	SE 20	長さ現在 133 cm	底径 80 cm						21枚で構成

第1表 出土遺物観察表

図版番号	登録番号	名称	グリッド	遺構	国	初 鑄 年 代	表裏	備 考
51	010-01	元豊通寶	D 2	SX 5	北宋	元豊元年 (1078)	裏	行書
52	〃	元豊通寶	〃	〃	北宋	元豊元年 (1078)	表	行書
53	〃	永楽通寶	〃	〃	明	永楽6年 (1408)	表	
54	〃	開元通寶	〃	〃	唐	武徳4年 (621年)	表	真書
55	〃	宣徳通寶	〃	〃	明	宣徳8年 (1433)	裏	真書
56	〃	皇宋通寶	〃	〃	北宋	宝元元年 (1038)	表	篆書
57	〃	元祐通寶	〃	〃	北宋	元祐2年 (1086)	裏	行書
58	〃	皇宋通寶	〃	〃	北宋	宝元元年 (1038)	裏	篆書
59	〃	皇宋通寶	〃	〃	北宋	宝元元年 (1038)	裏	真書
60	〃	永楽通寶	〃	〃	明	永楽6年 (1408)	表	
61	〃	慶元通寶	〃	〃	南宋	慶元元年 (1195)	表	裏に「元」の背文字あり
62	〃	永楽通寶	〃	〃	明	永楽6年 (1408)	表	
63	〃	洪武通寶	〃	〃	明	洪武元年 (1368)	裏	
64	〃	洪武通寶	〃	〃	明	洪武元年 (1368)	表	
65	〃	宣徳通寶	〃	〃	明	宣徳8年 (1433)	裏	
66	〃	永楽通寶	〃	〃	明	永楽6年 (1408)	表	
67	011-01	永楽通寶	B 2	SX 42	明	永楽6年 (1408)	表	
68	〃	元祐通寶	〃	〃	北宋	元祐2年 (1086)	裏	行書
69	〃	紹聖元寶	〃	〃	北宋	紹聖元年 (1094)	裏	篆書
70	〃	皇宋通寶	〃	〃	北宋	宝元元年 (1038)	裏	篆書
71	〃	皇宋通寶	〃	〃	北宋	宝元元年 (1038)	裏	真書
72	〃	景祐元寶	〃	〃	北宋	景祐元年 (1034)	裏	真書、一部欠損
73	〃	治平元寶	〃	〃	北宋	治平元年 (1064)	裏	真書
74	〃	聖宋元寶	〃	〃	北宋	建中靖国元年 (1101)	表	行書
75	〃	元豊通寶	〃	〃	北宋	元豊元年 (1078)	裏	篆書
76	〃	皇宋通寶	〃	〃	北宋	宝元元年 (1038)	裏	篆書
77	〃	天聖元寶	〃	〃	北宋	天聖元年 (1023)	表	篆書
78	〃	洪武通寶	〃	〃	明	洪武元年 (1363)	表	
79	〃	祥符元寶	〃	〃	北宋	大中祥符元年 (1009)	裏	
80	〃	開元通寶	〃	〃	唐	武徳4年 (621年)	表	真書
81	〃	咸平元寶	〃	〃	北宋	咸平元年 (998)	裏	
82	〃	咸平元寶	〃	〃	北宋	咸平元年 (998)	裏	
83	012-01	天聖元寶	D 2	SX 43	北宋	天聖元年 (1023)	表	真書
84	〃	天聖元寶	〃	〃	北宋	天聖元年 (1023)	裏	真書
85	〃	元祐通寶	〃	〃	北宋	元祐2年 (1086)	裏	行書
86	〃	太平通寶	〃	〃	北宋	太平興国元年 (976)	裏	
87	〃	景德元寶	〃	〃	北宋	景德元年 (1004)	表	
88	010-02	元豊通寶	D 2	SX 44	北宋	元豊元年 (1078)		行書

第2表 出土銭貨一覧表

※表裏とは鑄着して一括出土した51～66、67～82、83～87の任意の一方から順に見た表・裏を示す。
 ※備考欄の書体は、複数の書体があるものについてのみ、その書体を記した。記載のないものは、真書である。



調査区遠景（西から）



調査前風景（西から）



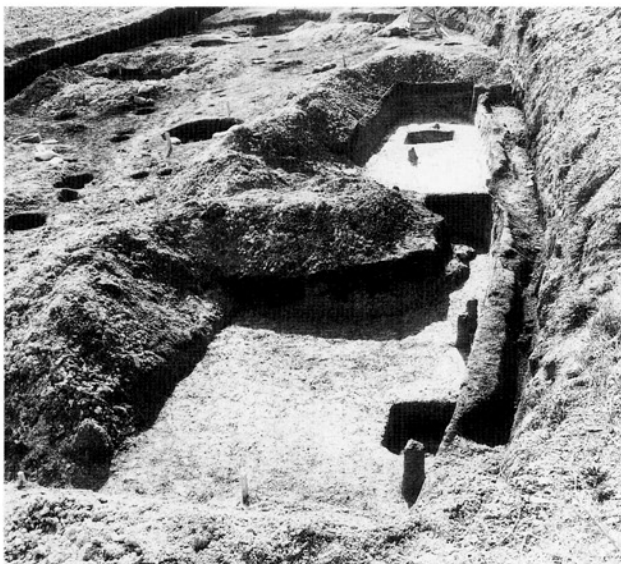
調査区全景（東から）



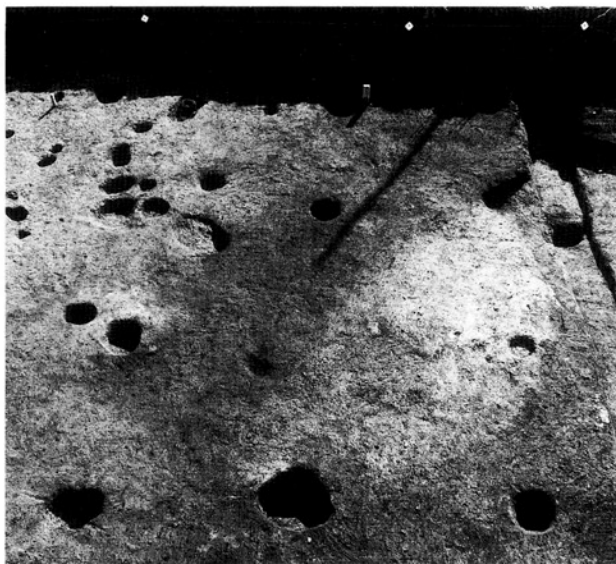
A地区東部下層調査区全景（西から）



A地区西部下層調査区全景（西から）



B地区下層調査区（東から）



S B 36（北から）



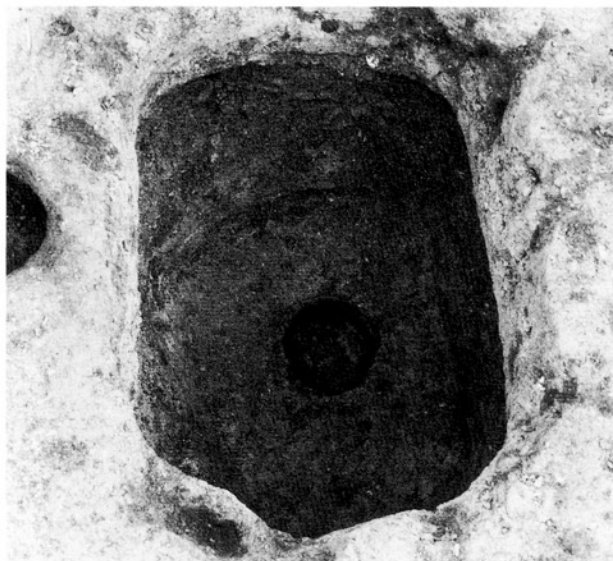
B地区掘立柱建物群（東から）



S D 10・S D 17（北から）



S K 26 (北から)



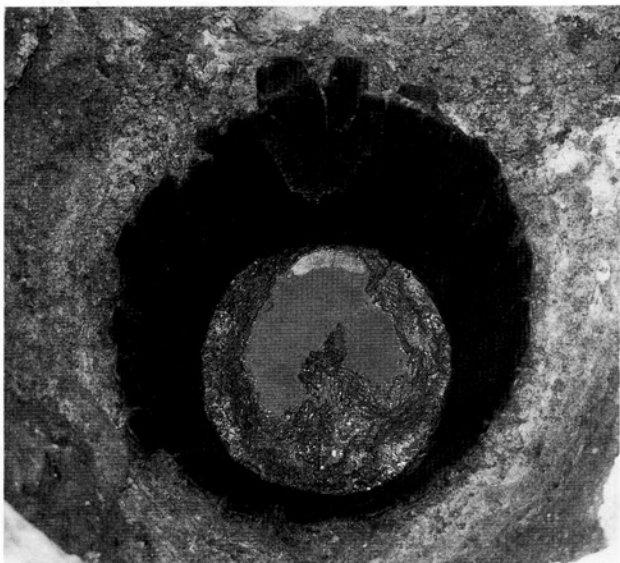
S K 11 (西から)



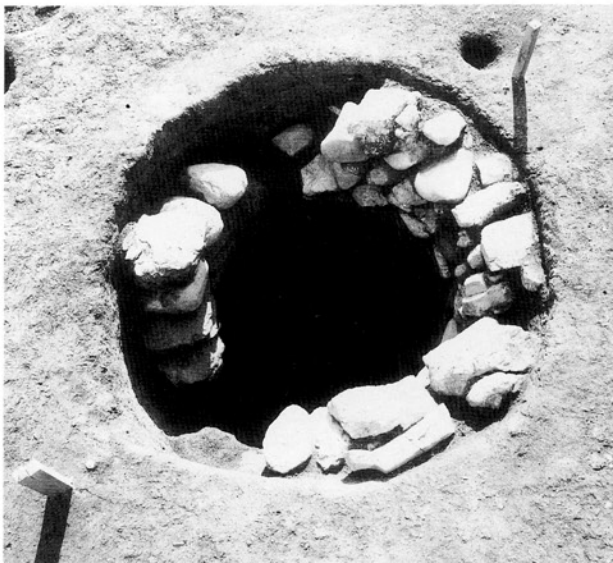
S X 5 (西から)



S X 42 (北から)



S E 20 (東から)



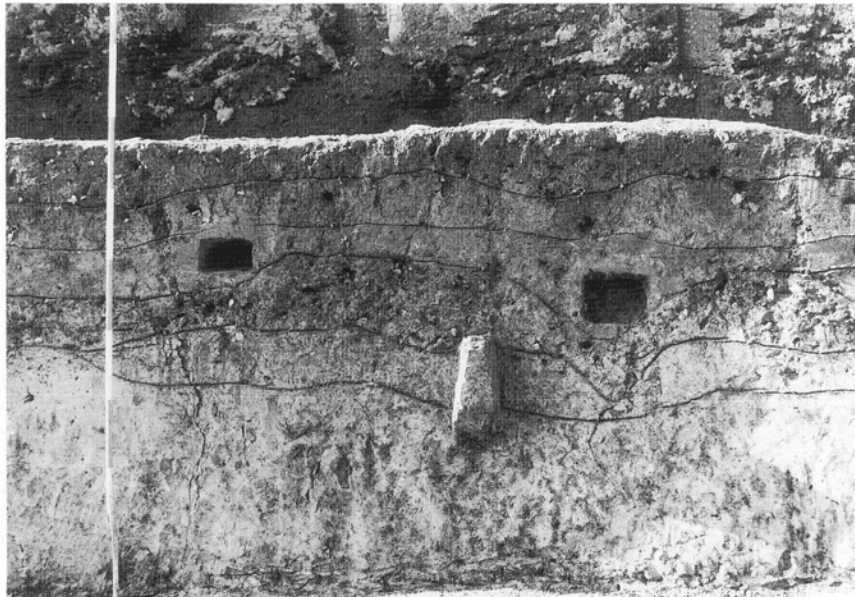
S E 32 (北から)



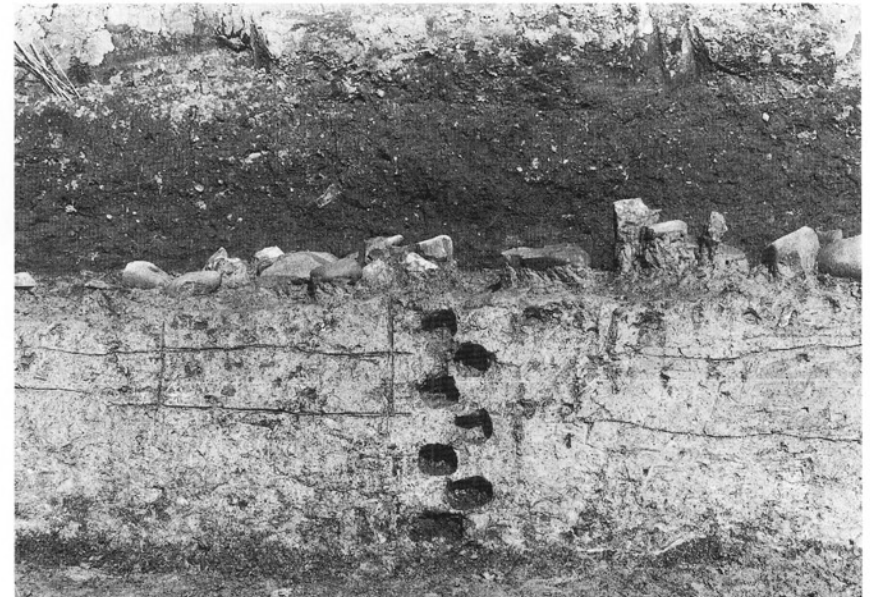
B地区下層調査風景（東から）



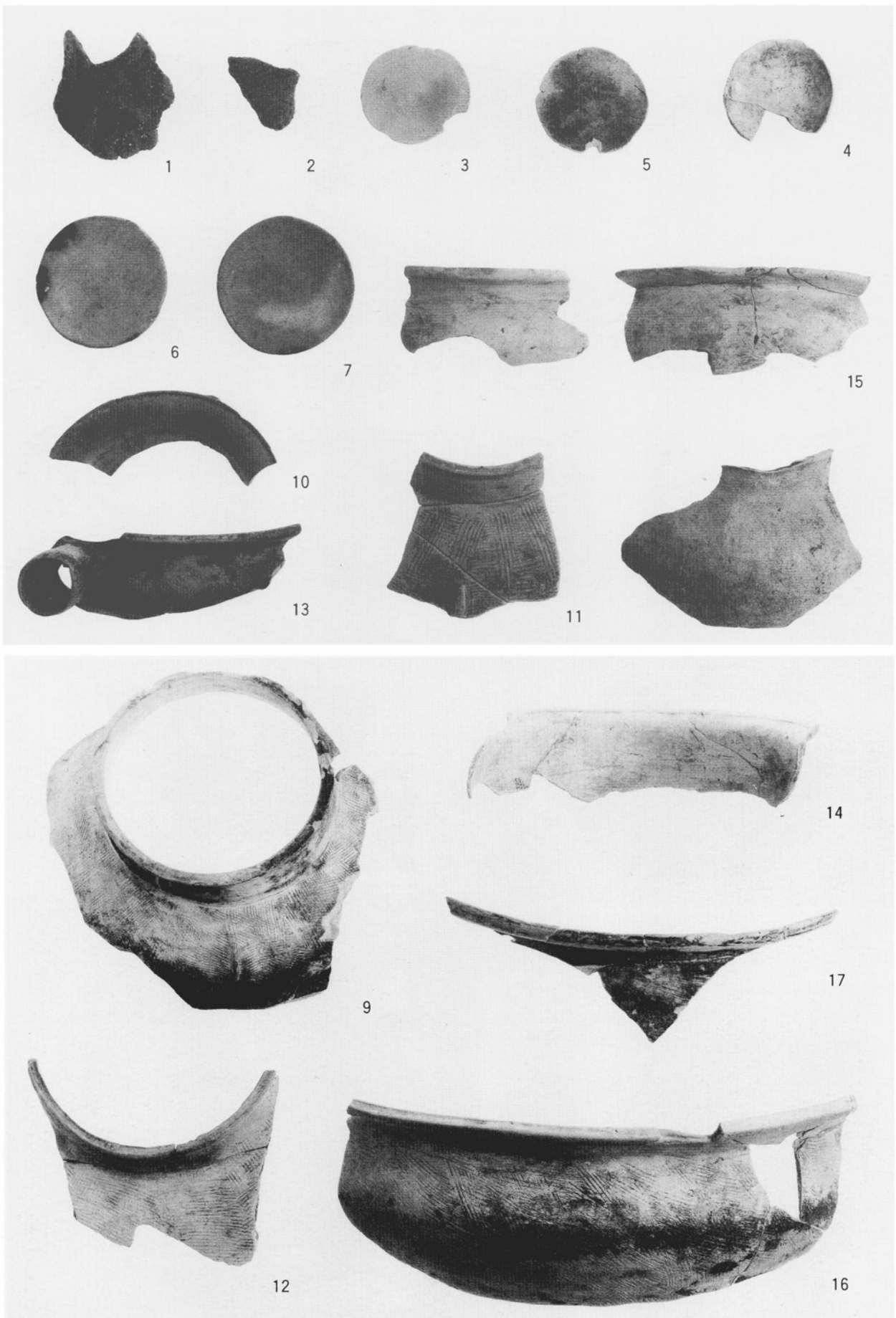
B地区下層石器出土状況（南から）



B地区下層サンプル土採取地点土層（南から）



B地区下層礫群出土状況（南から）



出土遺物 (1) (1 : 3)



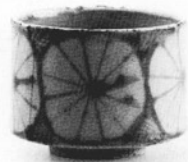
8



20



21



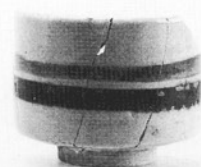
19



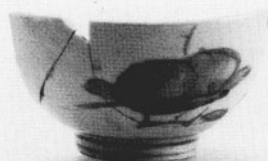
28



22



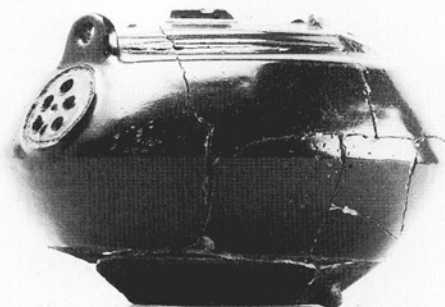
27



29



37



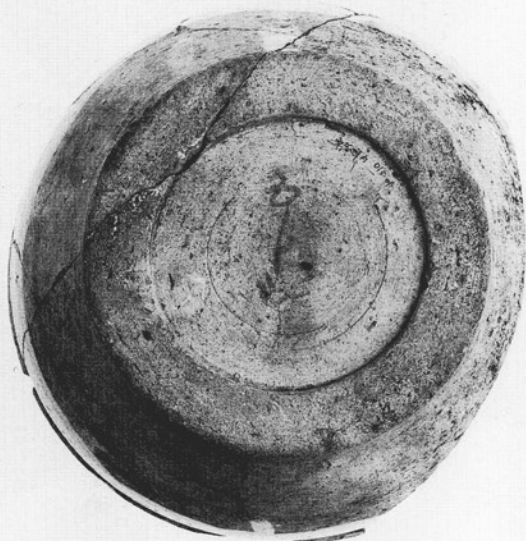
25



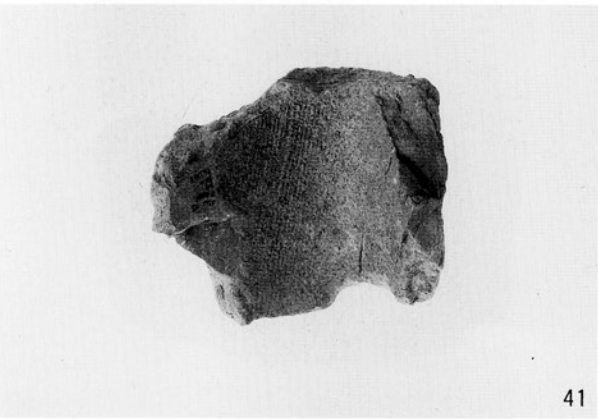
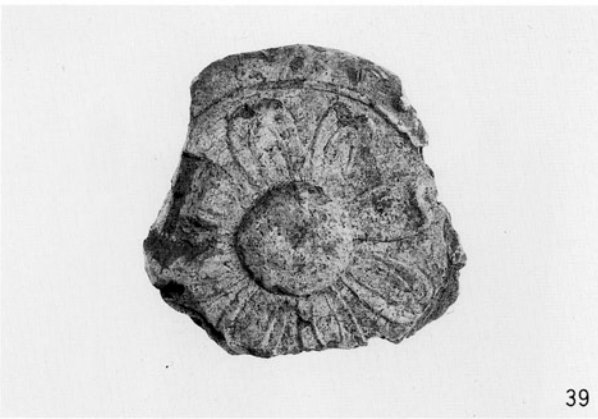
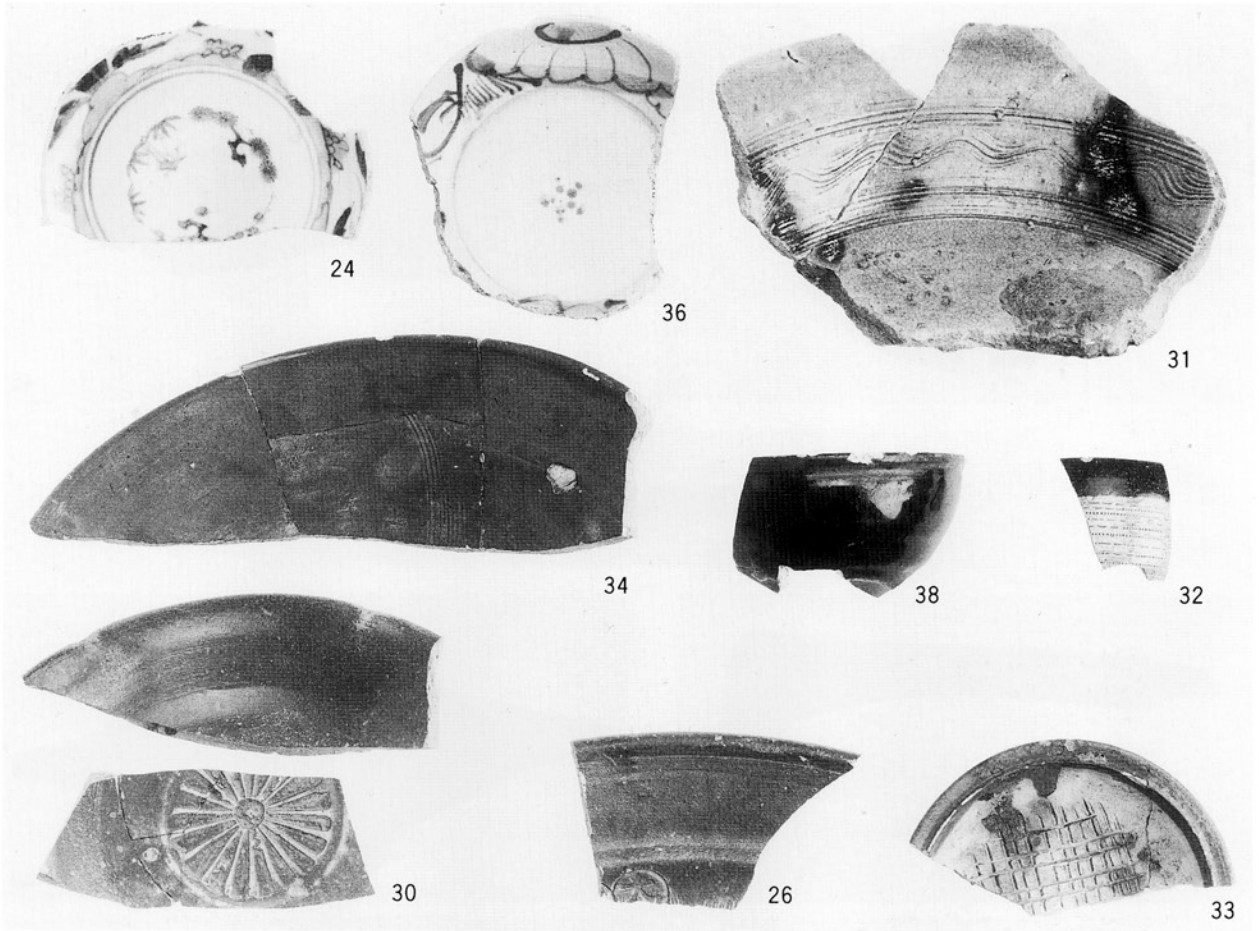
35



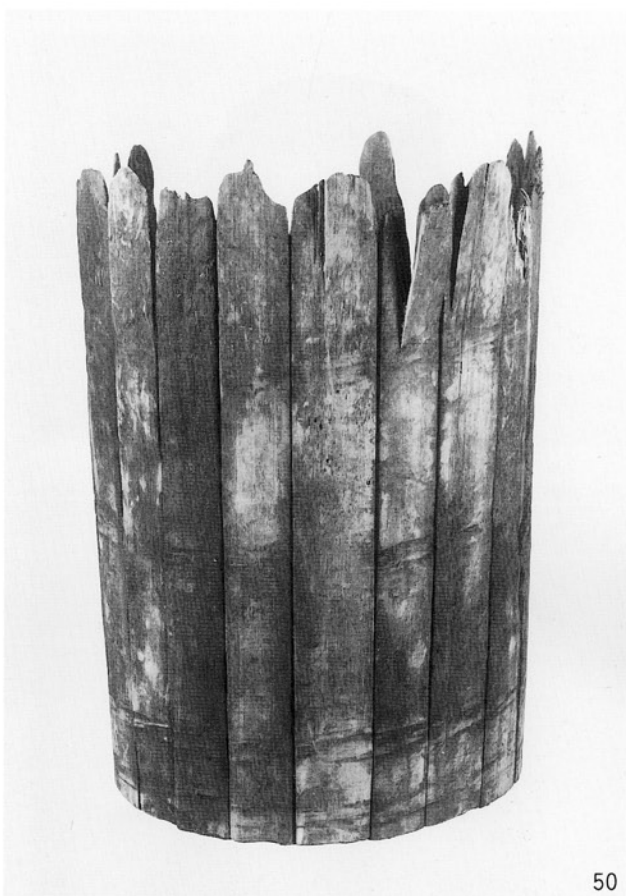
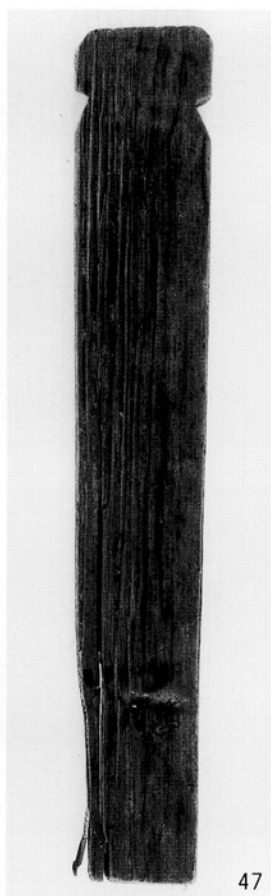
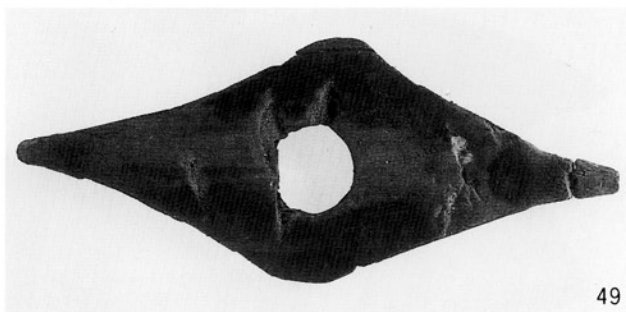
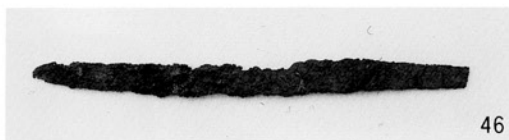
23



23



出土遺物 (3) (1 : 3)



出土遺物(4) (43・45・46は、1:3、47は1:2、48・49は、1:4、50は、1:15)

報 告 書 抄 録

ふりがな	うちがいとういせきはつくつちようさほうこく
書名	内垣外遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	159
編著者名	西出 孝
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503
発行年月日	西暦1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うちがいとういせき 内垣外遺跡	みえけんたきぐん 三重県多気郡 たきちようおうかせ 多気町相鹿瀬 あざうちがいとう 字内垣外	24441		34° 27' 09"	136° 32' 50"	19961126 \n 19970305	上層 1000 m ² 下層 150 m ²	県道相鹿瀬大 台線道路整備 事業に伴う事 前調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
内垣外遺跡	集 落 跡	縄文時代 室町時代～ 江戸時代	縄文時代土坑 掘立柱建物6棟 溝4条、井戸4 基、中世墓4基 土坑	フレイク、砥石 敲石、縄文土器 土師器皿・鍋 甕・茶釜 陶器皿・椀・甕 茶釜・鉢類 奈良時代瓦、 江戸時代瓦 刀子・輸入銭 井戸杵・農具 蘆民将来札	

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年8月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 159

内垣外遺跡発掘調査報告

—多気郡多気町相鹿瀬—

平成9年3月31日

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷者 東海印刷株式会社
